西部開発事業(畑地帯総合土地改良事業)

—緊急発掘調査報告—

# 中　村　遺　跡

1978

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

**—緊急発掘調査報告—**

# 中　村　遺　跡

**堀　址　全　景（西側より眺む）**

1978

伊那市教育委員会

南信土地改良事務所

# 序

伊那市西春近地区の西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）は昭和47年度で下牧、昭和48年度で上島、東方、昭和49年度で村岡、東方、城、山本、昭和51年度で沢渡と次々に行なわれてきました。今までに、これらの開発事業に先立って調査してきた遺跡数は相当数に及んでいます。このような貴重な埋蔵文化財を守るための最終的な方策として、緊急発掘調査を行ない、報告書にまとめ、記録保存という措置をとってまいりました。

中村遺跡は昭和52年度土地改良事業地区内に該当するとのことで、昭和52年12月中に実施されました。その成果は、縄文前期の竪穴住居址１軒、弥生後期の竪穴住居址１軒、奈良時代の竪穴住居址１軒、土壙９、堀址ピット５、堀址１であった。これらの遺構のなかで最も注目すべきものは堀である。当西春近地区には数多くの城郭遺構が存在しているが、今回のように、これだけ見事な堀が発見できたのは不思議なかぎりであります。

最後に、発掘調査に御貢献いただきました団長友野良一先生、調査団の諸先生をはじめ直接調査にたずさわられた作業員、また調査の進行に御協力をおしまなかった南信土地改良事務所職員一同、地元の委員のかたがたにその労をねぎらい、心から敬意を表します。

昭和53年３月３日

伊那市教育委員会

教育長　伊　沢　一　雄

# 凡　　例

1．今回の発掘調査は県営圃場整備に伴なう，土地改良事業で，第5次緊急発掘調査にもとずく報告書とする。

2．この調査は，県営畑地帯総合土地改良事業に伴なう緊急発掘で，国・県・市の補助金のもとに，事業は長野県南信土地改良事務所の委託により，伊那市教育委員会が実施した。

3．本調査は，昭和52年度中に業務を終了する義務があるため，報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし，資料の再検討は，後日の機会にゆずることにした。

4．本文執筆者は，次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

飯塚政美，田畑辰雄

◎図版作製者

○遺構及び地形

友野良一，飯塚政美，田畑辰雄

◎写真撮影

○発掘及び遺構

友野良一，飯塚政美，田畑辰雄

○遺　物

友野良一，飯塚政美，田畑辰雄

5．本報告書の編集は主として，伊那市教育委員会があたった。

# 目　　次

序
**凡　例**
目　次
挿図目次
表 目 次
図版目次

**第Ⅰ章　環　　境**……（1～3）

第1節　位　置……（　1　）
第2節　地形・地質……（　2　）
第3節　周辺遺跡との関連……（　2　）

**第Ⅱ章　発掘調査の経過**……（4～6）

第1節　発掘調査の経緯……（　4　）
第2節　調査の組織……（　4　）
第3節　発掘日誌……（5～6）

**第Ⅲ章　遺　　構**……（7～25）

第1節　住居址……（7～16）
第2節　土　壙……（16～19）
第3節　ロームマウンド……（　19　）
第4節　堀ピット……（20～21）
第5節　堀　址……（21～25）

**第Ⅳ章　遺　　物**……（25～27）

第1節　土　器……（25～27）
第2節　石　器……（　27　）

**第Ⅴ章　ま と め**……（　28　）

挿　図　目　次


第１図　位置及び遺跡分布図……（１）
第２図　地形図……（３）
第３図　遺構配置図……（７）
第４図　第１号住居址実測図……（８）
第５図　第１号住居址埋甕炉断面図……（９）
第６図　第２号住居址実測図……（９）
第７図　第２号住居址埋甕炉断面図……(10)
第８図　第３号住居址実測図……(10)
第９図　第３号住居址埋甕炉断面図……(11)
第10図　第４号住居址実測図……(11)
第11図　第４号住居址埋甕炉断面図……(12)
第12図　第５号住居址実測図……(12)
第13図　第５号住居址埋甕炉断面図……(13)
第14図　第６号住居址，第７・８号土壙実測図……(13)
第15図　第６号住居址カマド実測図……(14)
第16図　第７号住居址実測図……(15)
第17図　第７号住居址埋甕炉断面図……(15)
第18図　第８号住居址埋甕炉断面図……(15)
第19図　第８号住居址実測図……(16)
第20図　第１号土壙・第１号ロームマウンド実測図……(17)
第21図　第２・３・４・５・６・９・10号土壙実測図……(18)
第22図　堀址第１号ピット実測図……(20)
第23図　堀址第２・５号ピット実測図……(21)
第24図　堀址第３号ピット実測図……(21)
第25図　堀址第４号ピット実測図……(21)
第26図　堀址実測図……(22)
第27図　堀址土層断面図……(25)

## 表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表……（２）
第２表　出土土器の形状一覧表（その１）……(26)
第３表　出土土器の形状一覧表（その２）……(26)
第４表　出土土器の形状一覧表（その３）……(26)
第５表　出土土器の形状一覧表（その４）……(27)
第６表　出土石器の形状一覧表（その１）……(27)
第７表　出土石器の形状一覧表（その２）……(27)

# 図 版 目 次

図版１　遺跡全景
図版２　遺　構
図版３　遺　構
図版４　遺　構
図版５　遺　構
図版６　遺　構
図版７　遺　構
図版８　遺　構
図版９　遺　構
図版10　遺　構
図版11　遺　構
図版12　遺　構
図版13　遺構及び遺物出土状況
図版14　出土土器
図版15　出土土器
図版16　出土土器
図版17　出土土器
図版18　出土石器
図版19　出土石器

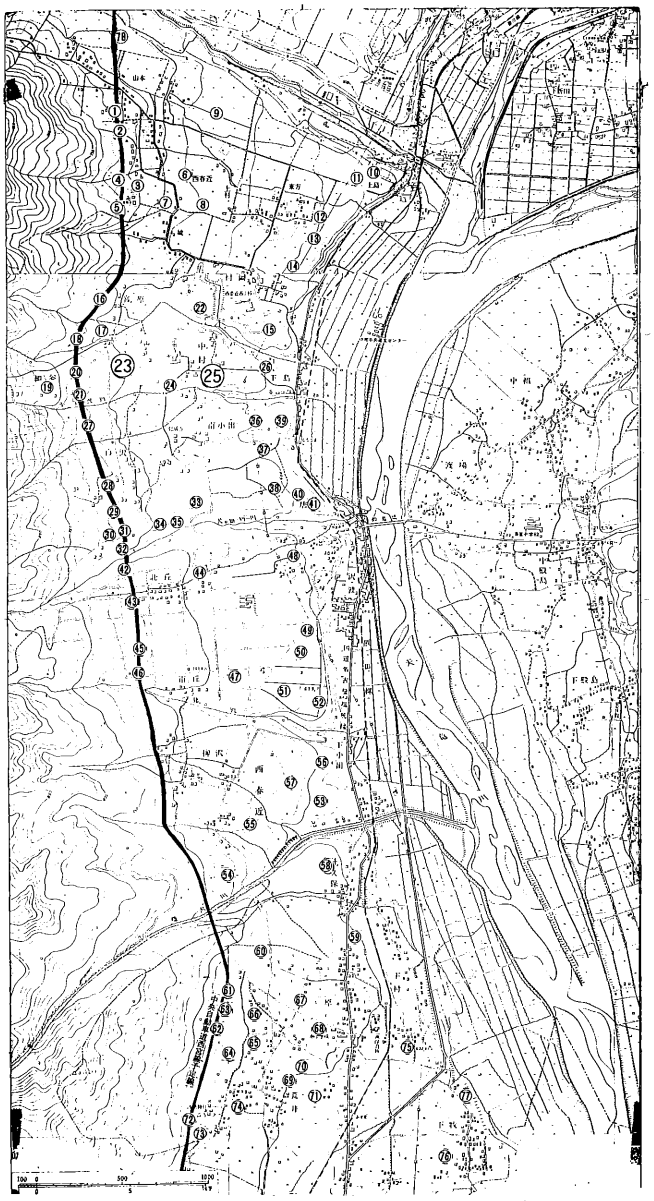
# 第Ⅰ章　環　　境

## 第1節　位　　置

中村遺跡は，長野県伊那市西春近中村・下島両部落にわたって所在している。伊那市街より遺跡までに至る道順は次の通りである。まず，飯田線下島駅で降り，西方へ天竜川第一段丘が発達している。この段丘の平坦面が遺跡地であり，北側は戸沢川，南側は小戸沢川にはさまれている。

遺跡の名称

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 城平上 | 40 | 唐木原 |
| 2 | 城　平 | 41 | 唐木古墳 |
| 3 | 常輪寺 | 42 | 北丘B |
| 4 | 宮　林 | 43 | 北丘A |
| 5 | 山の根 | 44 | 北丘C |
| 6 | 山　本 | 45 | 南丘B |
| 7 | 常輪寺下 | 46 | 南丘A |
| 8 | 上　村 | 47 | 南丘C |
| 9 | 北　条 | 48 | 眼子田原 |
| 10 | 上島下 | 49 | 山の神 |
| 11 | 上　島 | 50 | 上の塚 |
| 12 | 東方B | 51 | 沢渡南原 |
| 13 | 東方A | 52 | 下小出原 |
| 14 | 村岡北 | 53 | 天伯原 |
| 15 | 村岡南 | 54 | 南　村 |
| 16 | 大　境 | 55 | 東　田 |
| 17 | 中　原 | 56 | 天　伯 |
| 18 | 百駄刈 | 57 | 下小出原 |
| 19 | 西垣外 | 58 | 井の久保 |
| 20 | 細ケ谷A | 59 | 表木原 |
| 21 | 細ケ谷B | 60 | 山の下 |
| 22 | 小出城 | 61 | 菖浦沢 |
| **23** | **宮ノ原** | 62 | 富士山下 |
| 24 | 浜射場 | 63 | 富士塚 |
| **25** | **中　村** | 64 | 広垣外1 |
| 26 | 中村東 | 65 | 広垣外2 |
| 27 | 山寺垣外 | 66 | 鳥井田 |
| 28 | 白沢原 | 67 | 高遠道 |
| 29 | 名　廻 | 68 | 西春近南小学校附近 |
| 30 | 名廻西古墳 | 69 | 安岡城 |
| 31 | 名廻東古墳 | 70 | 城の腰 |
| 32 | 名廻南 | 71 | 横　吹 |
| 33 | 児　塚 | 72 | 和　手 |
| 34 | 鎮護塚西古墳 | 73 | 上手南 |
| 35 | 鎮護塚東古墳 | 74 | 宮入口 |
| 36 | カンバ垣外 | 75 | 寺　村 |
| 37 | 丸　山 | 76 | 下　牧 |
| 38 | 南小出南原 | 77 | 下牧経塚 |
| 39 | 薬師堂 | 78 | 山本田代 |



**第1図　位置及び遺跡分布図**

## 第２節　地形・地質

今までに西春近地区についての地形・地質について述べられているのを参考にして述べることにする。昭和51年度眼子田原遺跡発掘報告書によると『伊那谷に一般的に通ずる地形は西に，中央アルプス，東に南アルプス，その前山である伊那山脈とにはさまれた南北に細長い盆地状地形を成している。中央の最低部に源を諏訪湖に持つ天竜川が流れ，一般的によばれている縦谷状地形を成している。さらに本流である天竜川の両岸には数多くの小河川があり，それらによって形造された大小の扇状地，河岸段丘，渓谷が展開している。伊那市附近では小沢川，三峰川，小黒川が主たる河川であり，これらは同様に大きな段丘や扇状地を形成した要因となっている。』

本遺跡地は南北に流れる天竜川と西から東へ流れる戸沢川と，小戸沢川にはさまれた段丘突端部に広がっている。段丘の北側の戸沢川と南側の小戸沢川の段丘崖にはそれぞれ豊富な湧水がみられる。一段の段丘面の西側は小高い独立丘陵状の形となっていた。標高は648 m前後を測定できる。

遺跡地周辺は大部分が水田で，ところどころに畑がみられ，そのなかは桑畑となっている。

## 第３節　周辺遺跡との関連

中村遺跡は出土遺物より，縄文時代から戦国時代までにわたる遺跡であることが明らかになってきたが，調査区域が限定されていたので，結論づけられるような成果を穫るにはいたらなかった。そこで，ある程度，結論づけができるように犬田切川を中心にして分布している遺跡を時代別に表を利用してまとめてみた。

中村遺跡を含めた周辺遺跡の内容は次の通りである（第１図参照）

| No | 遺跡名 | 所在地 | 旧石器 | 縄文時代 | | | | | | 弥生時代 | | | 奈良・平安時代 | | | 中世 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 草 | 早 | 前 | 中 | 後 | 晩 | 前 | 中 | 後 | 土 | 須 | 灰 | | |
| 22 | 小出城 | 城 | | | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | ○ | (2270) |
| 23 | 宮ノ原 | 宮の原 | | | | | ○ | | | | | | | | | | (2288) |
| 24 | 浜射場 | 〃 | | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 25 | 中村 | 中村 | | | | | ○ | | | | | | | | | | (2285) |
| 26 | 中村東 | 〃 | | | | | | | | | | | ○ | | | | |
| 27 | 山寺垣外 | 白沢 | | | | | ○ | | | | | | | | | 青○ | 中央道　(8662) |
| 28 | 白沢原 | 〃 | | | | | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ | | 〃 (2274・8660) |
| 29 | 名廻 | 〃 | | | ○ | | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ | | 〃　(8672) |
| 30 | 名廻西古墳 | 〃 | | | | | | | | | | | | | | | 横穴式石室 |
| 31 | 名廻東古墳 | 〃 | | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | 中央道 |
| 33 | 児塚 | 〃 | | | | | ○ | | | | | | ○ | | | | |
| 34 | 鎮護塚西古墳 | 〃 | | | | | | | | | | | | | | | 横穴式石室 |
| 35 | 鎮護塚東古墳 | 〃 | | | | | | | | | | | | | | | 横穴式石室 |
| 36 | カンバ垣外 | 南小出 | | | | | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ | | |
| 37 | 丸山 | 〃 | | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| 38 | 南小出南原 | 〃 | | | | | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ | | (2271) |
| 39 | 薬師・堂 | 下島 | | | | | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ | 青○ | (2279) |
| 40 | 唐木原 | 唐木 | | | | ○ | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ | | |
| 41 | 唐木古墳 | 〃 | | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | 横穴式石室 |

第１表　周辺遺跡一覧表

第2図　地　形　図（1：1500）

# 第Ⅱ章　発掘調査の経過

## 第１節　発掘調査の経緯

西春近地区の西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は昭和48年度の上島，東方部落，昭和49年度の東方，村岡，城,山本部落にわたって行なわれてきました。昭和51年度は沢渡の上段の（眼子田原）地区が該当しました。発掘調査地区は水田であったために，一作収穫後に手をつける運びとなった。発掘調査は11月下旬から12月中旬にかけて行なわれました。発掘着工以前に南信土地改良事務所より委託する旨が伊那市教育委員会へ通知されました。市教育委員会ではその件について承諾しましたので，市教育委員会を中心に，中村遺跡発掘調査会を結成し，この中に調査団を含めて業務を行なうこととした。

南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

## 第２節　調査の組織

中村遺跡発掘調査会

調査委員会

| | | | |
|---|---|---|---|
| 委員長 | 伊沢　一雄 | 伊那市教育委員会教育長 | |
| 副委員長 | 福沢総一郎 | 伊那市文化財審議委員会委員長 | |
| 委員 | 赤羽　映土 | 伊那市教育委員長 | |
| 〃 | 原　益久 | 南信土地改良事務所長 | |
| 調査事務局 | 竹松　英夫 | 伊那市教育委員会社会教育課長 | |
| 〃 | 有賀　武 | 〃 | 課長補佐 |
| 〃 | 米山　博章 | 〃 | 係長 |
| 〃 | 三沢真知子 | 〃 | 主事 |

発掘調査団

| | | |
|---|---|---|
| 団長 | 友野　良一 | 日本考古学協会会員 |
| 副団長 | 根津　清志 | 長野県考古学会会員 |
| 〃 | 御子柴泰正 | 〃 |
| 調査員 | 飯塚　政美 | 〃 |
| 〃 | 田畑　辰雄 | 〃 |
| 〃 | 福沢　幸一 | 〃 |
| 〃 | 荻原　茂 | 東京薬科大学学生 |
| 〃 | 丸山　弥生 | 長野県考古学会会員 |

## 第３節　発掘日誌

昭和52年11月30日　発掘の遺物出土地が不明なために遺物の出土した地点を集中的に調査する。

昭和52年12月２日　発掘地点を決定するために分布調査をする。

昭和52年12月３日　発掘地点を決定するために分布調査をする。

昭和52年12月５日　発掘地点を決定するために分布調査をする。

昭和52年12月６日　発掘地点を決定するために分布調査をする。

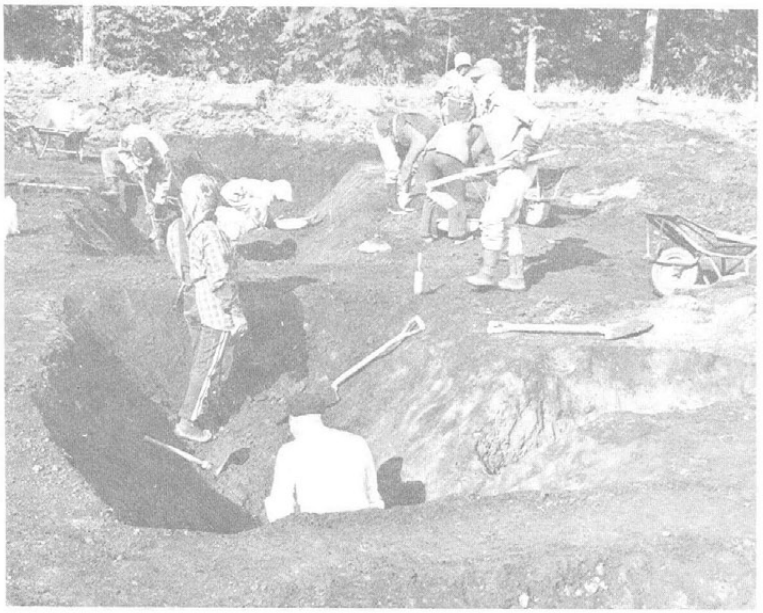
昭和52年12月７日　発掘地点を戸沢川の南岸，小戸沢川の北岸，天竜川第１段丘面の合わさった段丘の突端部に遺物が集中していた。そこで，ブルトーザーを現地へ入れて表土剝ぎをする。ローム層まで表土から60～70cm位あった。表土剝ぎ実施後，グリットうちをする。グリット番号は北から南へ１～34，東から西Ａ～０とする。

昭和52年12月８日　昨日，設定したグリットにもとづき，Ａ１から１つ置きにグリット掘りを開始する。人数が多いこと，また，作業員達が精鋭部隊のために，グリット掘りははかどり，たちまちにして昨日設定したグリットを大部分掘り尽してしまった。掘り尽してしまうと各所にわたって多数の落ち込みがみられ，それを第１号住居址，第２号住居址，第３号住居址，第４号住居址，第５号住居址，第７号住居址，第８号住居址，第１号土壙，第２号土壙，第３号土壙，第４号土壙，第５号土壙，第１号ロームマウンドであった。

昭和52年12月９日　第１号住居址，第２号住居址，第３号住居址，第４号住居址，第５号住居址第６号住居址，第７号住居址，第１号土壙，第１号ロームマウンドの掘り下げ及びその完掘をする。住居址をよく観察してみると，第１号住居址は隅丸方形で，埋甕炉は正位であった。第２号住居址は隅丸方形で正位の埋甕炉同住居址の南側より勾玉が発見され，これは硬玉製であった。

第３号住居址は隅丸方形で，正位の埋甕が３個並んで出土した。第４号住居址は隅丸方形で，正位の埋甕炉

第５号住居址は隅丸方形で，正位の石囲の埋甕炉　第６号住居址は奈良時代の住居址でその床面を２つの土壙が切っていた。



発　掘　風　景

第７号住居址は隅丸方形で，正位の埋甕炉をもっていた。それぞれの埋甕は全て弥生後期のものであった。

昭和52年12月10日　グリット掘りをさらに南側へ進めていくと，東西に走る一直線状の黒土の落ち込みがみられた。それは，堀であることが判明し，その規模は北側は戸沢川の段丘へ，東側は天竜川の段丘へとそれぞれ連結していた。堀は弧状を描いている模様であり，掘り下げを続けていくと，矢研堀状になっており，深いところでは約１ｍ50㎝程もあった。

昭和52年12月12日　昨日に，引き続いて，堀の全掘に精力を注ぐ，矢研堀りであったこと，また発掘作業員が多数であったために夕方までには堀の全貌が判明した。堀のなかからは堀の時期に直接的に関連する遺物の出土は何もみられなかった。堀の全体を調査していく途中で，北側の一角に堀に切り取られたかっこうで楕円形の住居址が発見された。この住居址は縄文前期終末期のもので第８号住居址と命名し，その完掘に全力を注ぎ込む。夕方までには，ほぼその全体の様子が把握できた。さらに，堀の両肩にピット状の遺構が数カ所にわたって判明した。

昭和52年12月13日　堀の堆積土状況を調査するために残した土層図の作製をする。

昭和52年12月14日　第１号住居址から第４号住居址までの平面図及び断面実測

昭和52年12月15日　第５号住居址から第８号住居址までの平面及び断面実測

昭和52年12月16日　土壙及びピットの実測をする。

昭和52年12月17日　堀及び全測図の作製をする。

昭和52年12月19日～昭和52年12月22日　発掘作業のあとかたづけをする。

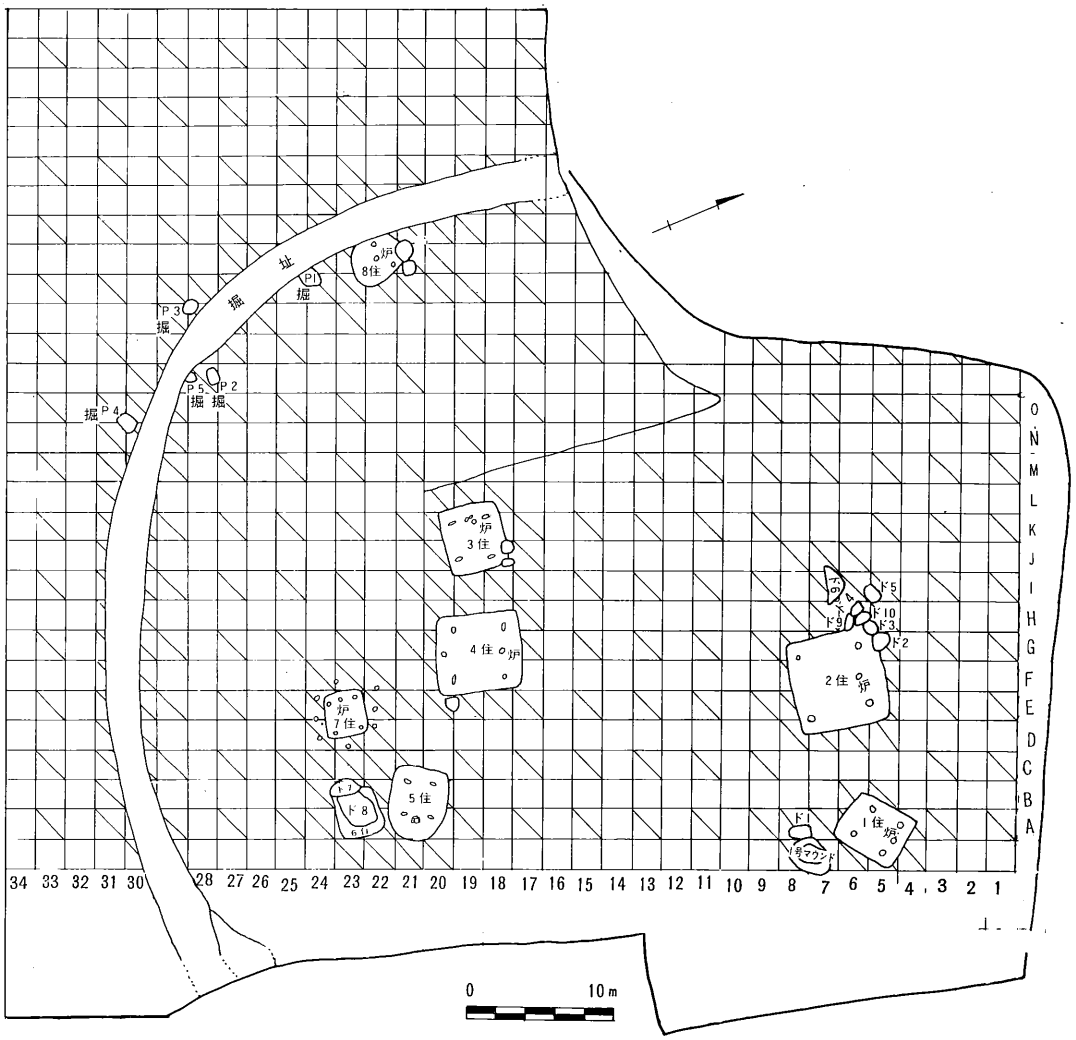
（飯塚　政美）

# 第Ⅲ章　遺　　構

## 第1節　住　居　址

**第1号住居址**　（第4～5図，図版3）

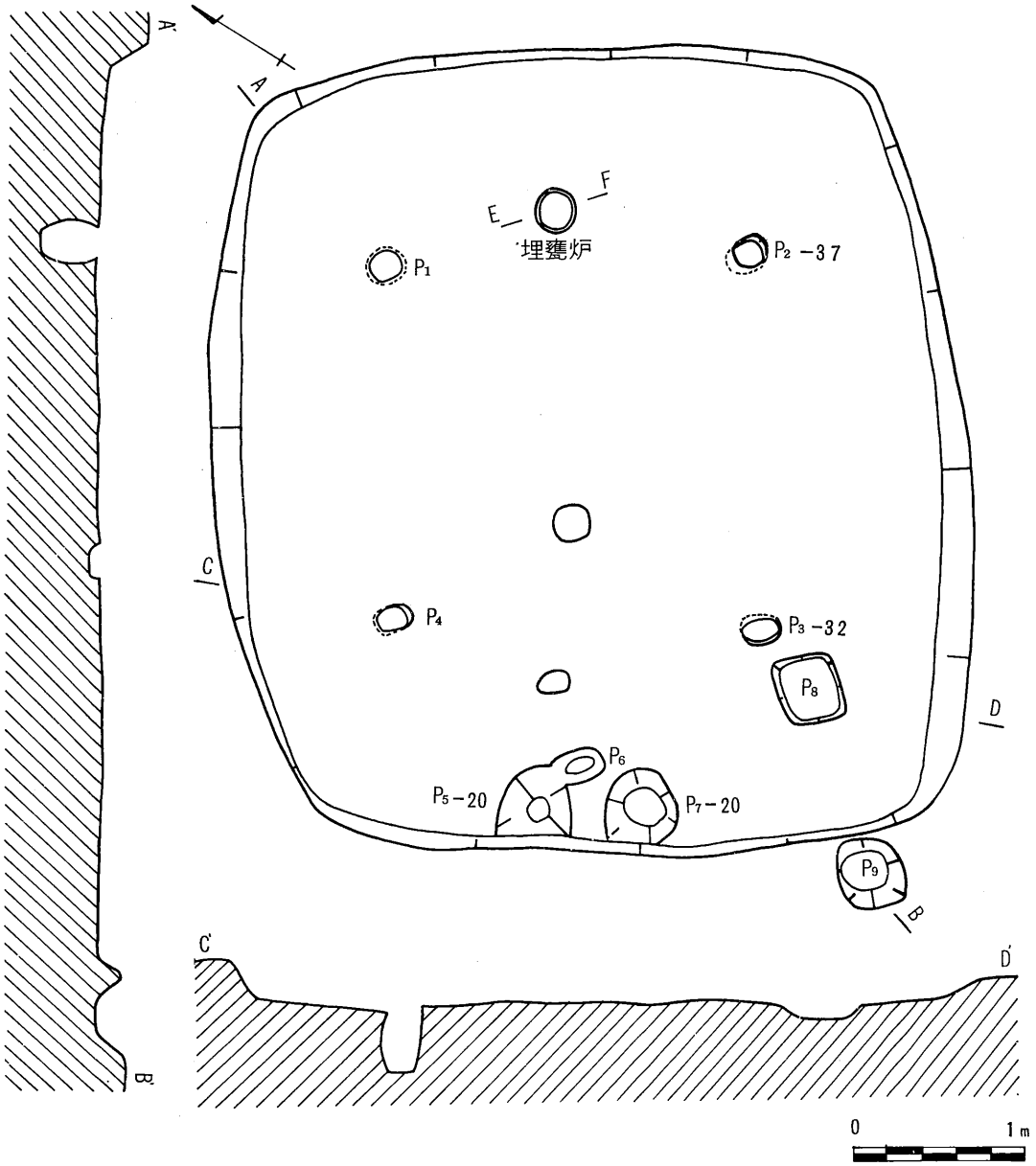
住居址群中の北東端に発見され，隅丸方形プランを持つ竪穴住居址である。規模は4m70cm×4m35cm程で一般的な大きさと思われる。壁は外傾し，北壁では20cm，南壁では15cm，東壁では10cm前後を計る。壁下には溝等の施設は発見されなかった。床面はやや凹凸があり，ローム層中を敲打してあった。床面上の施設として柱穴は9本発見されたが，主柱穴と見られるものは$P_1$～$P_4$の4ケ




第3図　遺構配置図

と推察できる。4本の主柱穴は若干細長く，また，断面袋状を呈していた。

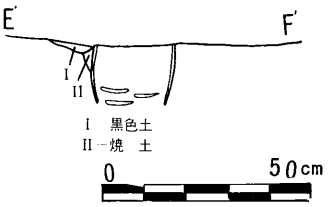
炉は$P_1$と$P_2$を結ぶ直線の中心点よりやや北側に位置し，土器を火壺とした埋甕炉で，火壺の西側の器壁の外面は堅い焼土があった。甕は正位の状態の出土で，口縁部は床面とほぼ同一レベル上に埋めてあった。本址は弥生時代後期の住居址と思われる。




第4図　第1号住居址実測図

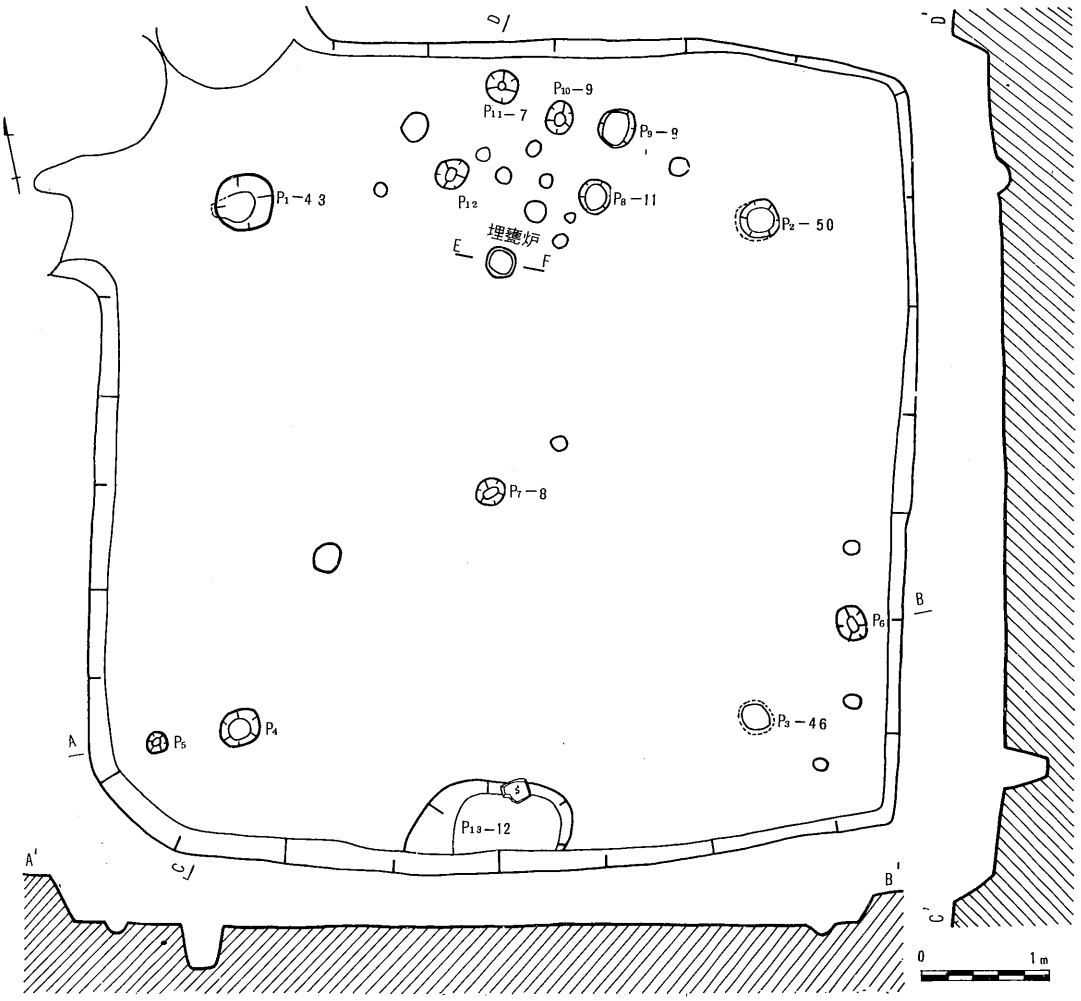
**第２号住居址**　（第６～７図，図版３）

第１号住居址の西側に発見され，表土面より60cm位下ったローム層面を掘り込み，隅丸方形プランの竪穴住居址で，南北６ｍ52cm×東西６ｍ40cm程の規模を持っている。壁は北西の一角は土壙によって切られているために現在はそれは存在しなかった。壁高は30～40cm位の範囲内にあり，壁面はわずかに凹凸があり，さらにかたくたたいてあった。勾配はかなり急であった。




**第５図　第１号住居址埋甕炉断面図**

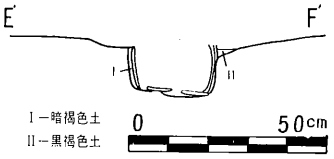
床面は大般水平であり，かたく叩いてあった。主柱穴は４本認められ，それは$P_1$，$P_2$，$P_3$，$P_4$であった。炉は北壁によって設けられ，$P_1$と$P_2$の直線に結ぶ点より若干南側に位置していた。埋甕炉の状態は正位で検出され，焼土の量は微量であった。遺物として本址の南側の地点より勾玉の出土があった。本址は弥生後期の住居址と思われる。




**第６図　第２号住居址実測図**

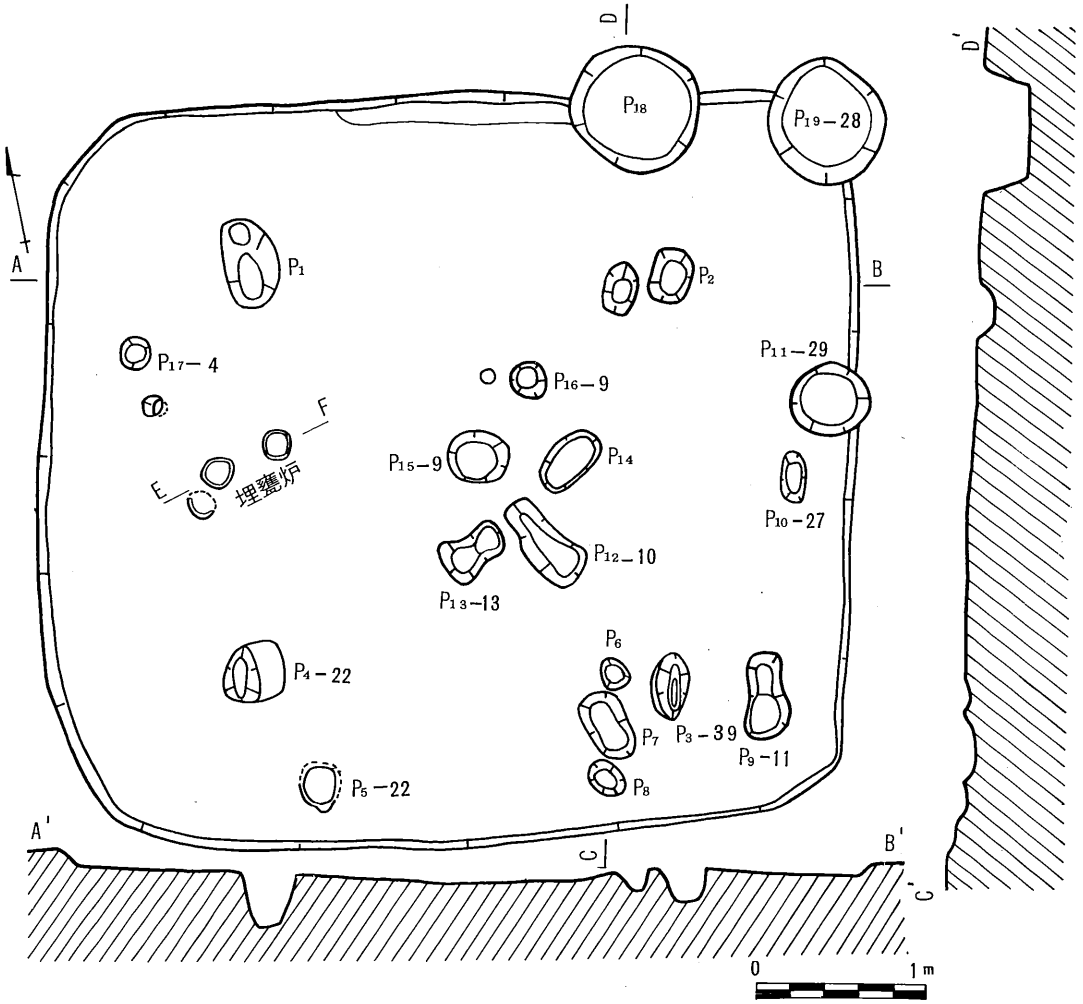
**第３号住居址**　（第８～９図，図版４）

本址は東側で第４号住居址と近接して発見され，表土面より60cm位下ったローム層を掘り込んで構築してある。規模は南北４ｍ42cm東西４ｍ75cm位の規模を有し，平面プランは隅丸方形の竪穴住居址である。壁高は浅くて，わずかに10数cm程度であった。壁面はわずかに外傾し，軟弱気味であった。




**第７図　第２号住居址埋甕炉断面図**

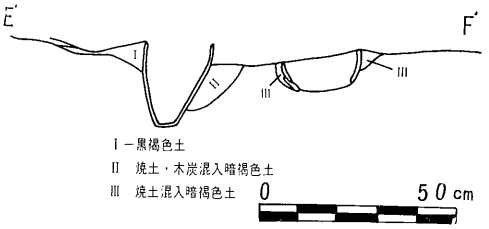
床面は攪乱のために凹凸が顕著であったが部分的にはかたいタタキのところも認められた。ピットはいたるところで認められたが主柱穴となり得るのは４本と思われ，それはP1，P2，P3，P4であろう。炉はP1とP4の二つを結ぶ線上にあり，わずかに北東に触れて３個並んで発見された。埋甕は３個とも正位の状態で出土し，それらの周囲は赤く焼けていた。埋甕炉より本址は弥生後期の住居址と思われる。




**第８図　第３号住居址実測図**

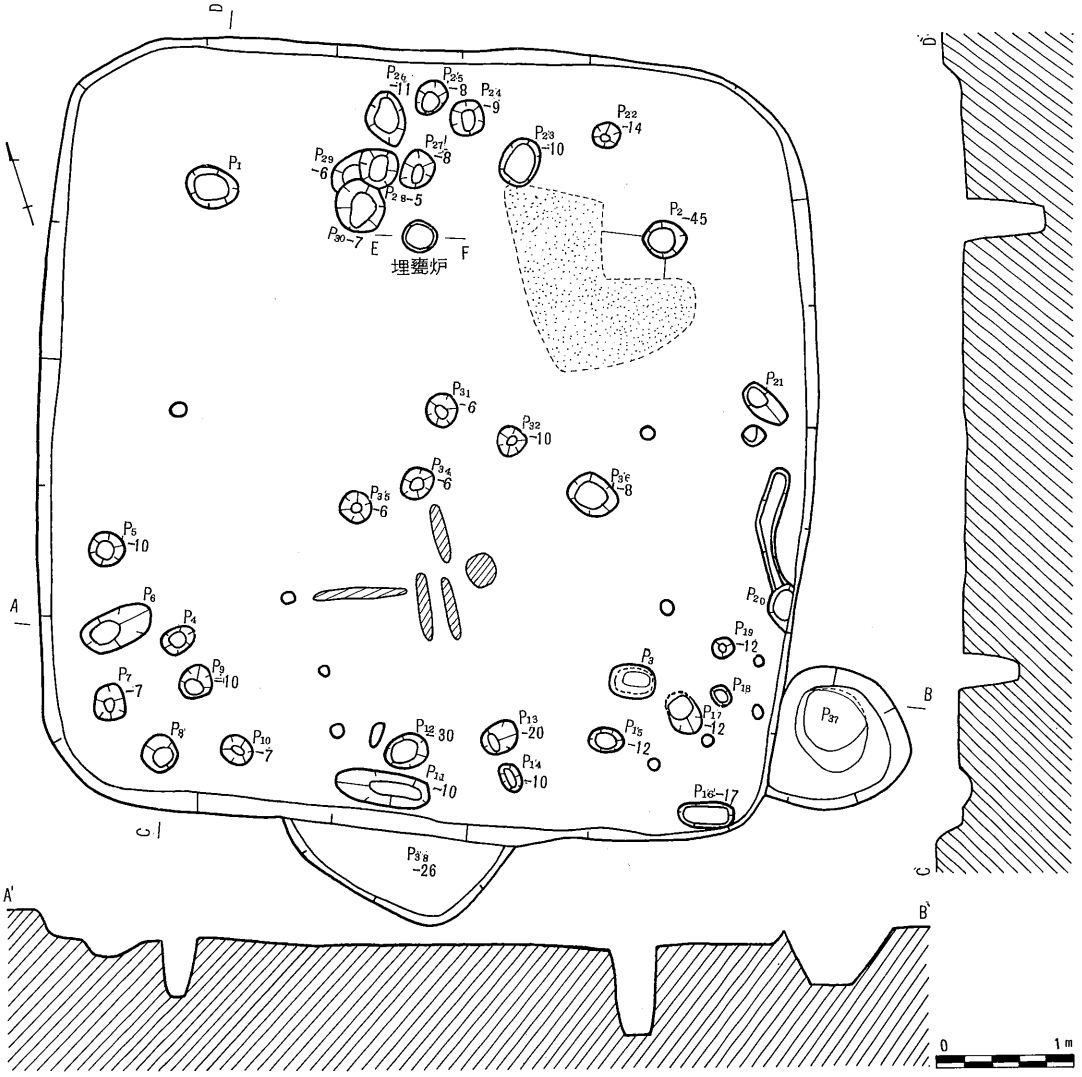
**第４号住居址**　（第10～11図，図版４）

本址は第３号住居址の東側に発見され，表土面より60cm位下ったローム層面を掘り込んで構築されていた南北５ｍ75cm，東西５ｍ75cm程の規模を有し，隅丸方形プランの竪穴住居址である。壁高は20cmと浅くて相当な傾斜がみられる。東壁の壁面は凹凸が著しい。




**第９図　第３号住居址埋甕炉断面図**

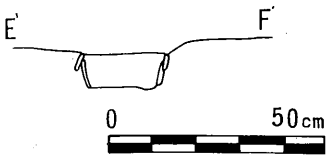
床面はかたいタタキがみられるが，凹凸が顕著である。また同面上には火災にあったとみえて，多くの炭化物や焼土の検出をみた。床面上の施設として主柱穴は４ケ所あり，それは$P_1$，$P_2$，$P_3$，$P_4$である$P_1$と$P_2$の中間に埋甕炉が設けられている。埋甕炉内の状況は上面に焼土があり，下方には柔らかい炭と灰が充満している。本址は弥生時代後期の住居址と思われる。




**第10図　第４号住居址実測図**

**第５号住居址**　（第12～13図，図版５）

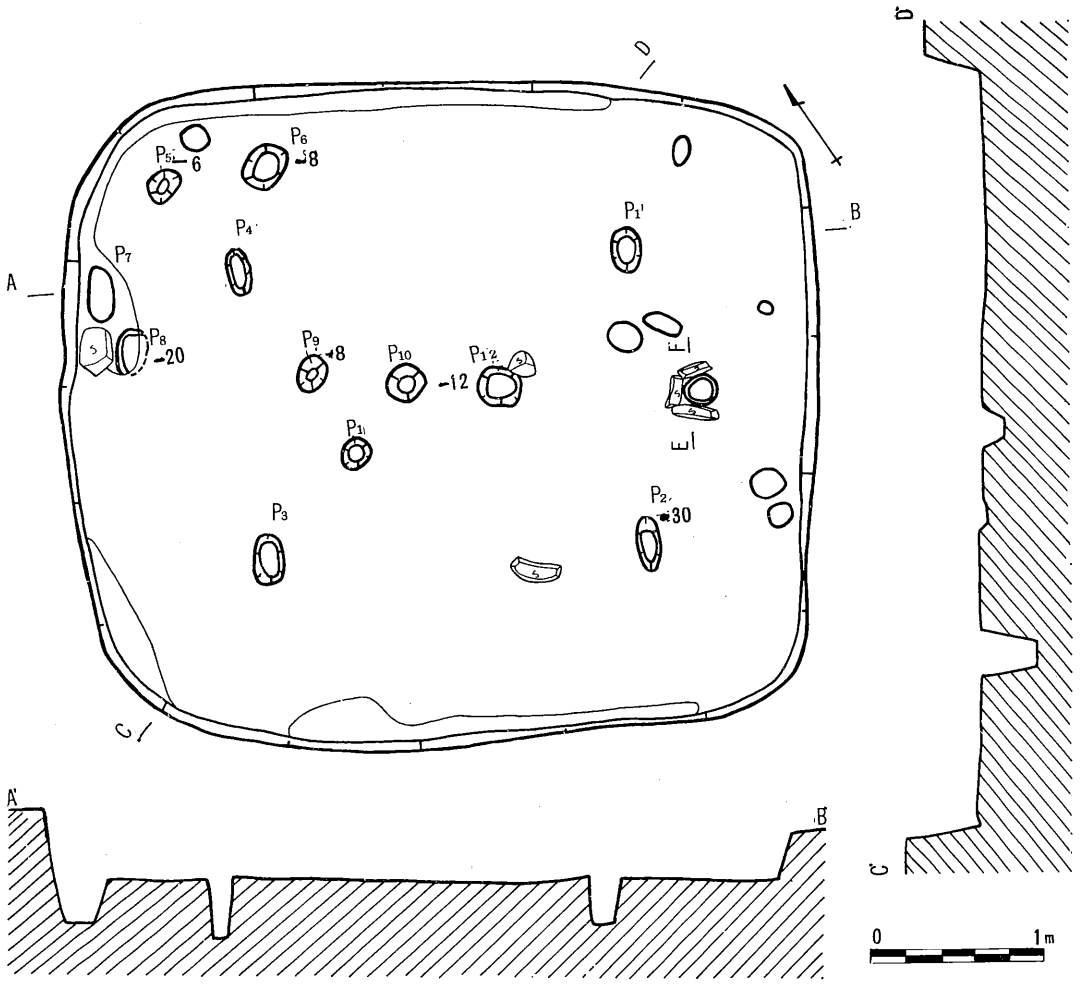
本址は第４号住居址の東側に発見され，表土面より－60cm位下ったローム層面を掘り込んで構築してある。隅丸方形を成し，南北３ｍ93cm×東西４ｍ42cmの竪穴住居址である。




**第11図　第４号住居址埋甕炉断面図**

壁はほぼ垂直に掘られ，深さ30～40cm位を計る。床はローム層の良好なるタタキであり，ほぼ水平となっていた。床面上の附属施設として北壁から西壁にかけて，南壁にそれぞれ周溝が発見された。主柱穴は４個あり，それは$P_1$，$P_2$，$P_3$，$P_4$であって，いずれも南北に細長くなっている。その他にかなりの量のピットが発見された。

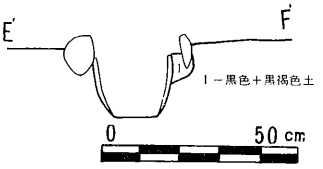
炉は$P_1$と$P_2$の中間より若干東側よりに築かれている。中央部に径20cm程の甕を埋め，その周囲に細長い枕石を西，北，南の３方面に配列してあった。埋甕の周囲には少量の木炭や焼土がみられた本址は弥生時代後期の住居址と思われる。




**第12図　第５号住居址実測図**

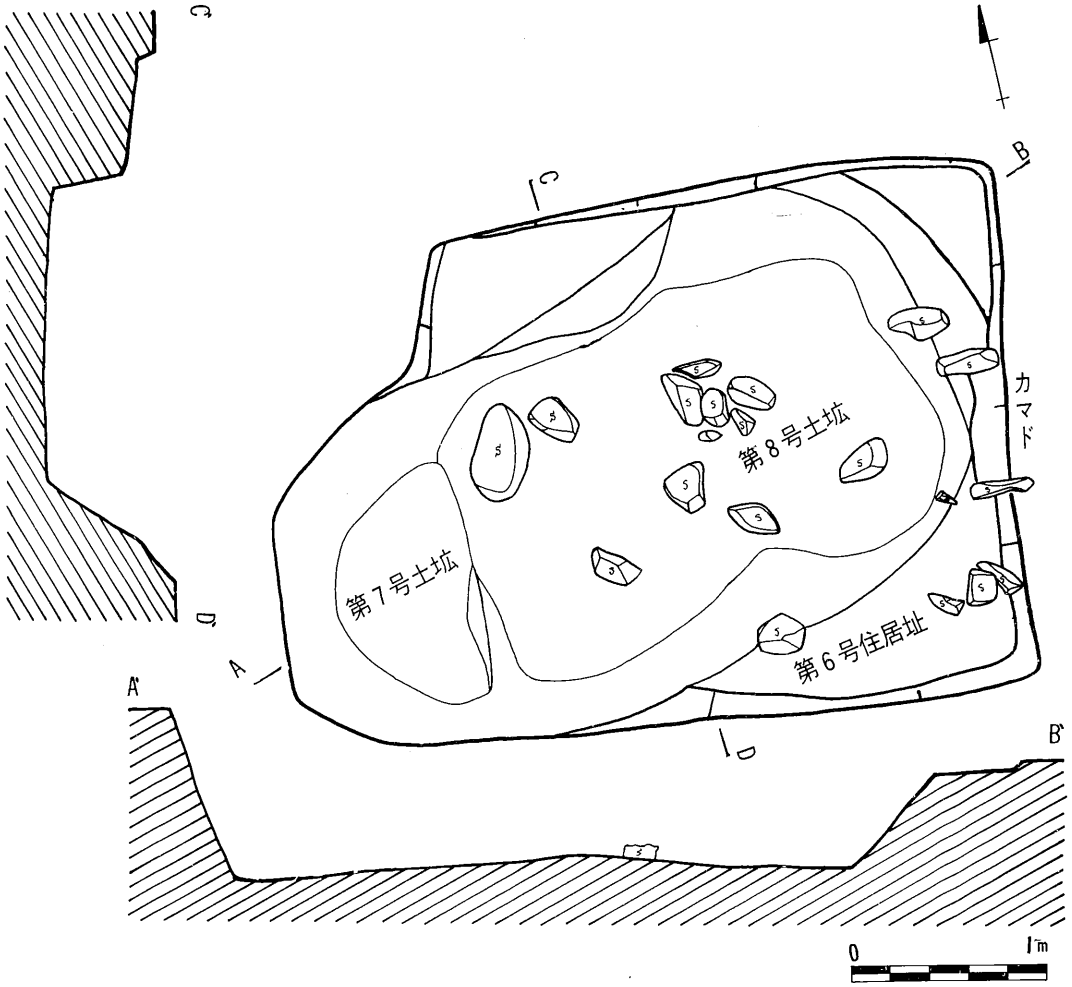
**第６号住居址**　（第14～15図，図版５）

本址は第５号住居址の南側に位置し，表土面から60cm位下ったローム層面を掘り込んで構築されている。床面の大部分は第７・８号土壙に切られてしまっている。その規模は推定するに南北２ｍ75cm東西３ｍ５cm程で，隅丸方形プランを呈する竪穴住居址である。壁高は10数cm程を測り，軟弱で凹凸が著しい。床面は軟弱で凹凸は著しい。




**第13図　第５号住居址埋甕炉断面図**

カマドは東壁の中央部附近にあり，石組粘土カマドであったと思われるが，現在は大部分破壊されてしまって，わずかに芯になる石と粘土が残存している程度であった。第８号土壙内の石はカマドに使用されたものと思われる。遺物は土師器片が出土し，奈良時代の住居址と思われる。




**第14図　第６号住居址・第７・８号土壙実測図**

**第７号住居址**　（第16～17図，図版６）

本址は発見された住居址群中，最南部に位置して発見され，さらに表土面より－60cm位下ったローム層面を掘り込んだ竪穴住居址である。プランは隅丸方形で，規模は南北３ｍ×東西３ｍ37cmを測定できる。

壁は外傾気味で，その高さは10数cmであった。その状態は，軟弱であり，凹凸がわずかにある。床面はかたくたたいてあり，大般水平であったが，荒れ方がいちじるしかった。

主柱穴は４本あり，それは$P_1$，$P_2$，$P_3$，$P_4$であった。

炉は$P_1$と$P_3$とを結ぶ直線の中心点附近に位置し，埋甕炉となっていた。甕は正位の状態で出土し，口縁部周辺には焼土や木炭が検出された。本址は弥生後期の住居址と思われる。

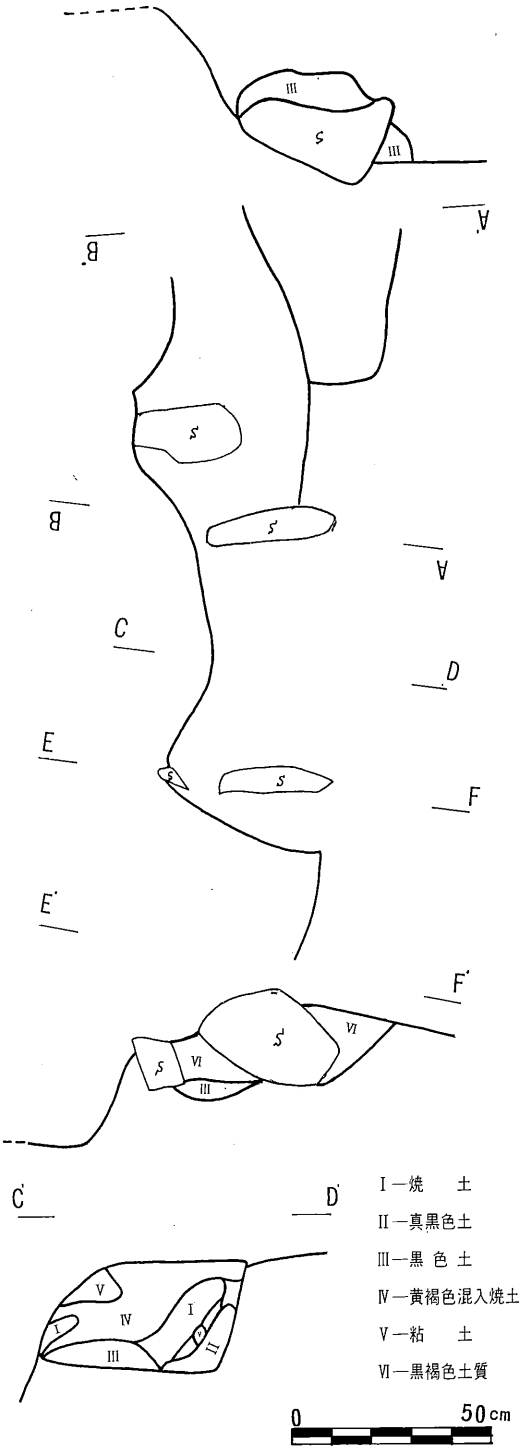
**第８号住居址**　（第18～19図，図版６）

本住居址は，今回検出された８軒の住居址のなかでは最も西側に位置し，西壁の一部分は中世時代の堀によって切られている。本址の掘り込み土層面はローム層であり，このローム層まで表土面より60cm程を測定できた。

平面プランは円形で，その規模は南北３ｍ45cm，東西は（推定によれば）３ｍ50cm前後であると思われる。壁高は20cm位あり，状態としては外傾し，軟弱気味，さらに凹凸が顕著となっていた。

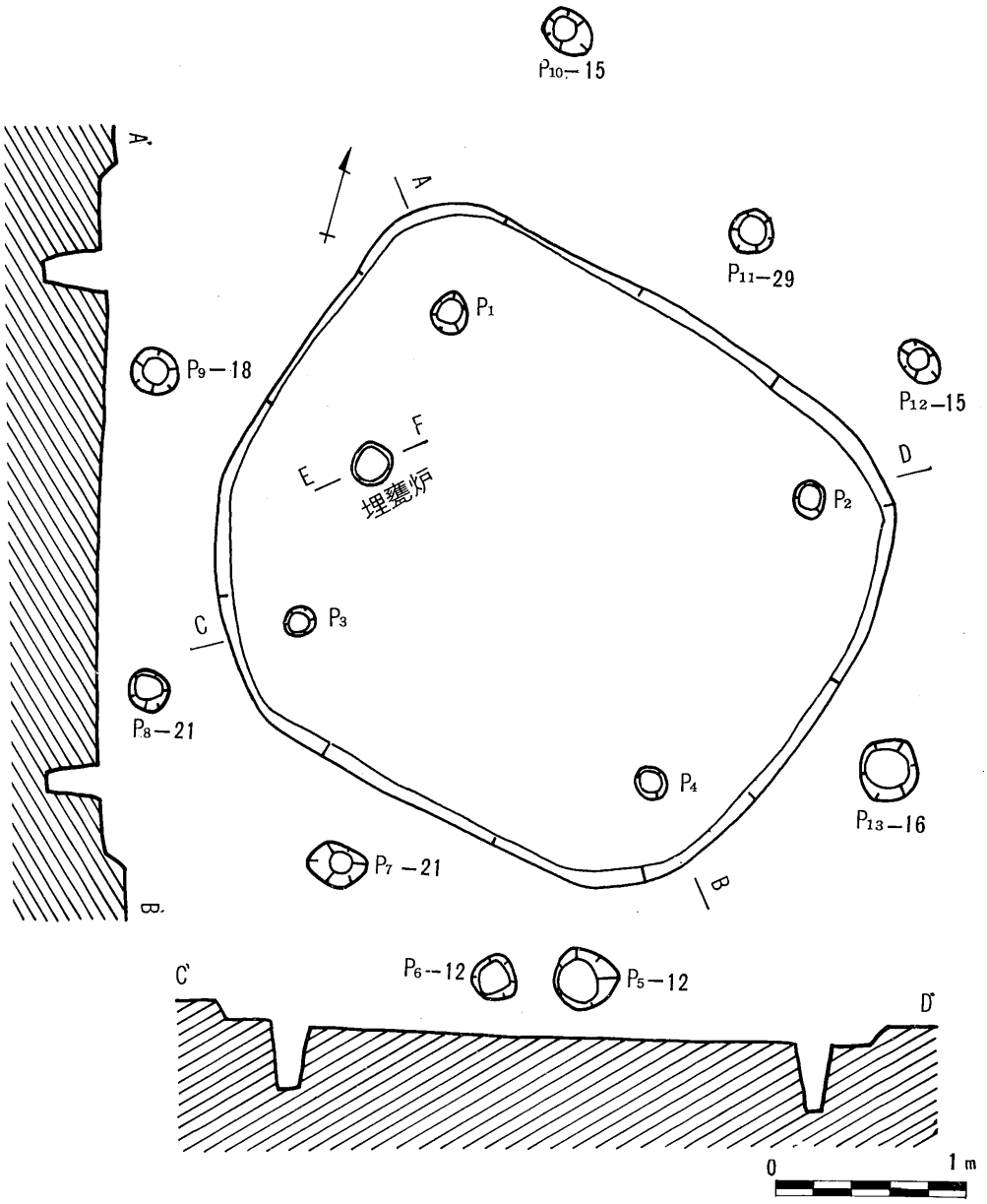
床面はかたいタタキであり，大般水平となっていた。柱穴は５本発見されたが，その内主柱穴となりそうなのは$P_1$，$P_4$，$P_5$であった。

住居址の中央部近くに埋甕炉がみられた。深さ25cm程度で，焼土と炭がわずかにみられた。埋甕は外反する深鉢形土器で正立の状態に埋められ，胴下半部及び底部は欠損していた。

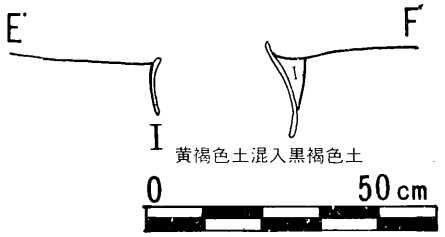



**第15図　第６号住居址カマド実測図**

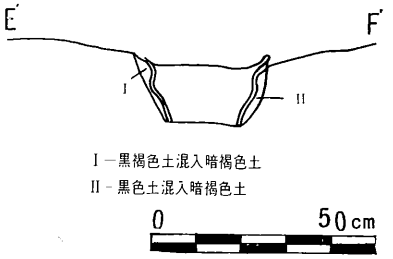
遺物は相当量出土した。時代は縄文前期終末期の土器がその９割を占め，なかには関西地方のも多くみられた。したがって本址は縄文前期終末期の住居址と思われる。　（飯塚　政美）



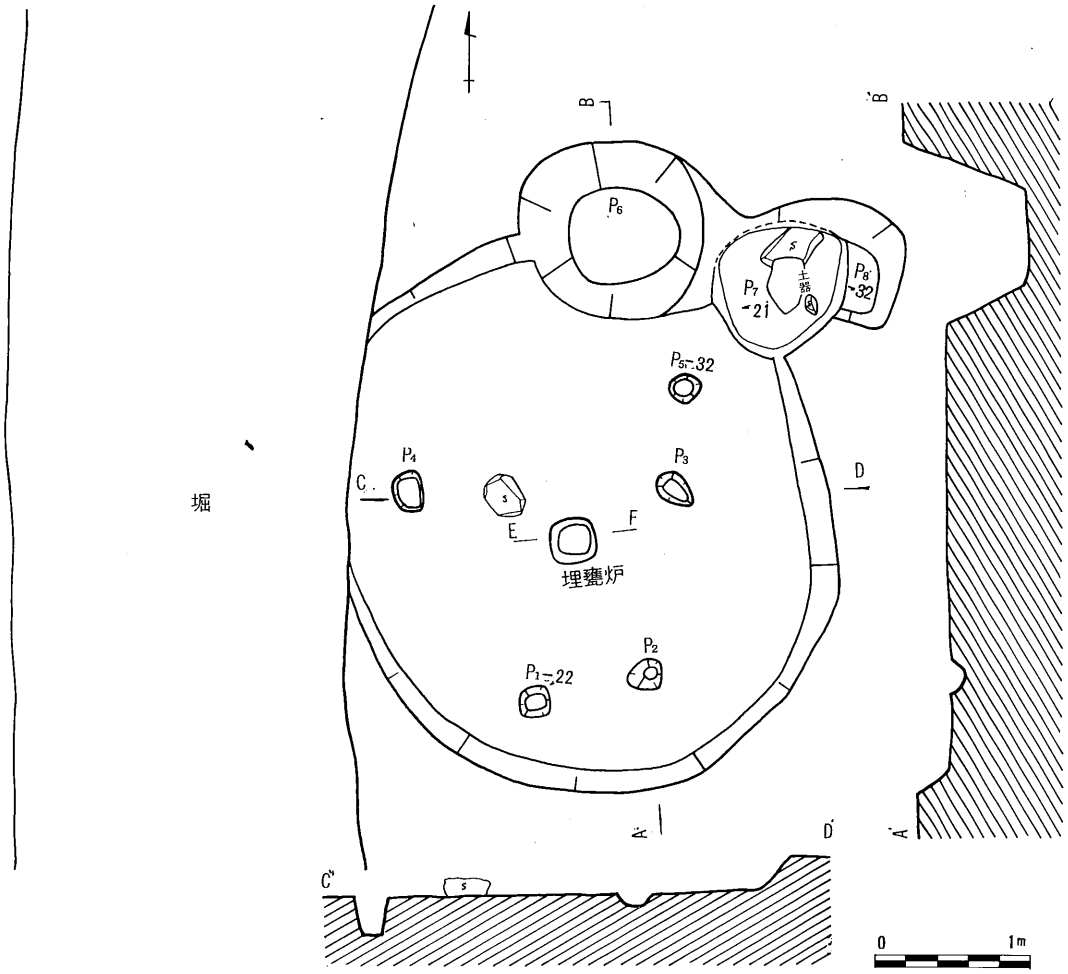

第16図　第７号住居址実測図




第17図　第７号住居址埋甕炉断面図




第18図　第８号住居址埋甕炉断面図




第19図　第８号住居址実測図

## 第２節　土　　壙

**第１号土壙**　（第20図，図版７）

本土壙は第１号住居址の南東の位置に，ローム層を掘り込んで築かれてある。南北１ｍ55cm×東西97cmの規模を持ち，平面プランは上面は長円形状，下部は面取り状になっており，長方形を呈している。壁面は北壁と南壁は垂直状に近く，西壁と東壁は内弯気味であった。さらに壁面は礫層の一部にくいこんでいたのでゴツゴツしていた。

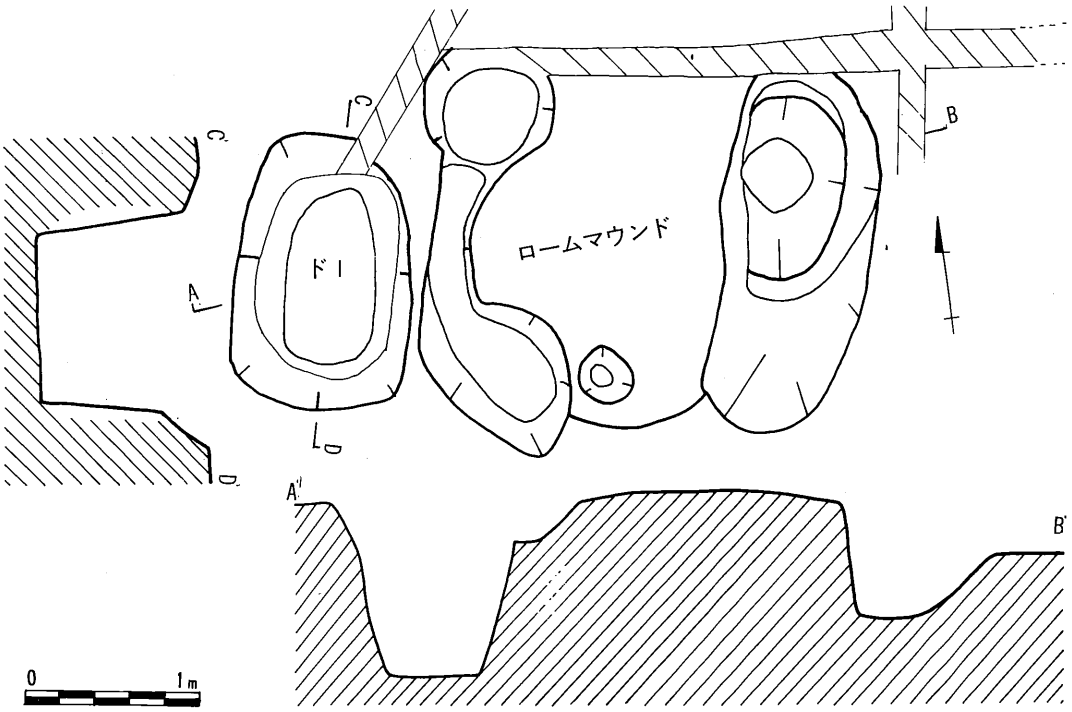
床面はかたいタタキで大般水平となっていた。遺物の出土は全くなかった。

**第２号土壙**　（第21図）

本土壙は第２号住居址の北西の隅に，また，第３号土壙と接して検出された。ローム層を掘り込んで構築されてあり，平面プランは楕円形状を呈している。その規模は南北１ｍ20cm×東西１ｍ，

壁面は全般的に内弯が強い。北壁の一部分は断面袋状になっている。床面は礫層の一部にくいこみ，大般水平で，わずかにかたいタタキとなっていた。

遺物は，全くなかった。




**第20図　第１号土壙・第１号ロームマウンド実測図**

**第３号土壙**　（第21図）

本土壙は東側で第２号土壙と接し，西側で第10号土壙を切っている。ローム層を掘り込み，円形プランを呈し，その規模は南北１ｍ，東西97cm程である。壁面は内弯状が強く，わずかな凹凸が認められた。特に，北壁は断面袋状を呈しており，土壙らしさを増していた。床面は砂利層に達し，わずかにかたいタタキが認められた。

遺物は，縄文前期終末の土器片が相当量出土した。

**第４号土壙**　（第21図）

本土壙は南壁で第９号土壙を切り，東壁で第10号土壙に切られている。ローム層を掘り込み，長円形状プランを呈し，その規模は南北１ｍ65cm，東西１ｍ程である。壁面は内弯状を呈し，細礫が無数にわたって露出していた。床両は軟弱で大般水平となっていた。床面の西壁に本土壙の床面を切るようなかっこうでピットが検出された。

遺物は，全くなかった。

**第５号土壙**　（第21図）

本土壙は第４号土壙の北側に発見され，ローム層を掘り込んでつくられている。平面プランは円形状を成し，規模は南北80cm，東西１ｍ20cm程を計ることが可能である。壁は50～60cm位を保ち，北壁は垂直状に，東壁，西壁，南壁は外傾状をそれぞれ呈している。南壁の南東の隅は若干とび出した形となっている。壁面での細礫の露出ははなはだしかった。床面は中央部が若干高くなり，かたいタタキ状のものが，礫層上面につくられていた。

遺物は，全くなかった。

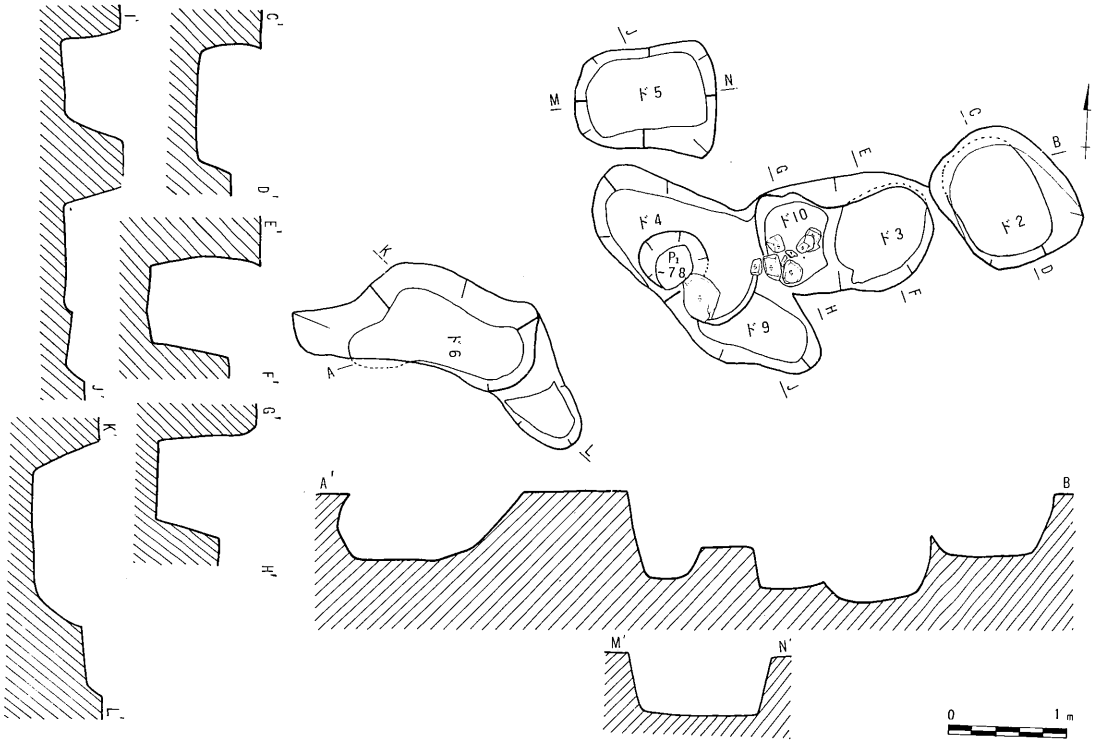
**第６号土壙**　（第21図）

本土壙は土壙の集中した地区では最西部に単独に発見された。ローム層を掘り込んで構築されてあり，その平面形プランは南側は直状線に，北側は弧状を成しており，全般的にみてみるならば半月形状を成している。平面の形を詳細にみてみると，ところどころに凹凸が顕著となっている。

壁面は西壁では内弯が強く，中央部にわずかに凹みが，東壁は外傾が強い。北壁は外傾気味，南壁は内弯気味をそれぞれ呈していた。ただ，四つの壁に共通することは，軟弱気味であること，また壁面全体にわたって礫が露出していた点である。

床面は礫層に達して築構されてあり，軟弱気味で、しかも凹凸が著しかった。

遺物としては覆土の中間部より焼土と木炭の出土がみられたが，土器，石器等の出土はなかった覆土は黒色土が大部分であった。




**第21図　第２・３・４・５・６・９・10号土壙実測図**

**第７号土壙**　（第14図，図版５）

本土壙は第６号住居址を切り，東壁は第８号土壙をも切っている。平面プランは円形状を呈し，その規模は南北１ｍ85cm，東西は切り合いの為に不明である。壁高は深くて85cm程あり，外傾が強く，わずかに凹凸が認められた。床面はローム層のかたいタタキで，大般水平となっていた。覆土中より多量の焼土と炭化物が検出された。

遺物は，全くなかった。

**第８号土壙**　（第14図，図版５）

本土壙は第６号住居址を切り，西側で第７号土壙に切られている。平面プランは割合に大きな楕円形状を呈し，その規模は南北２ｍ30cm，東西は切り合いのために不明である。壁高は35cm～50cm程あり，全般的に外傾が強く，凹凸が著しい。床面はかたいタタキで，割合に凹凸が著しい。同面上より30cm位浮いて人頭大程の礫が発見された。この礫は第６号住居址のカマドに利用されたものとの傾向が強いように思われる。覆土中より多量の焼土と木炭の出土が認められた。

遺物は，全く出土しなかった。

**第９号土壙**　（第21図）

本土壙は北壁は第４号土壙に切られている。ローム層を掘り込んでつくられ，長円形状プランを呈している。その規模は南北80cm，東西70cm程，（ただし南北は切り合いのために構築当時の規模は不明である）壁高は10cm前後を呈し，やや外傾していた。床面はかたいローム層のたたきであり、中央部へ向って若干高くなっていた。

遺物は，全く出土しなかった。

**第10号土壙**　（第21図）

本土壙は西壁で第４号土壙を切り，東側で第３号土壙に切られている。ローム層を掘り込んでつくられており，その規模は南北は95cm程，東西は切り合いのために構築時における規模は不明である。壁はわずかに外傾し，凹凸は少ない。床面はローム層のかたいタタキで大般水平となっていた。

遺物は，全く出土しなかった。　（飯塚　政美）

## 第３節　ロームマウンド

**第１号ロームマウント**　（第20図，図版７）

本遺構は第１号土壙の東側に接するようにして検出された。ローム層を中央部に盛り上げてマウンドとしてあり，その規模は南北１ｍ95cm程，東西１ｍ50cm程を持っている。マウンドの西側と東側にそれを取り囲くようにして溝が回っている。溝の中の覆土は黒色土が大部分で，そのなかより多量の炭化物の出土をみた。マウンドの中間層に入る黒色土の量は少なかった。

遺物は，縄文前期終末の土器片と打製石斧の出土をみた。

## 第4節　堀址ピット

本節は堀の両肩に発見された5カ所のピットを第2節土壙と区別して堀址ピットという名称をつけた。

**堀址第1号ピット**　（第22図，図版10）

本ピットは西壁で堀の上面を切るようなかっこうで検出された。ローム層を掘り込み，平面プランは上面は長円形，下部は面取りをしてあり，長方形状を呈す。規模は南北1m10cm×東西1m55cmを測る。壁面は西壁は内弯，東壁は外傾，南壁，北壁は途中に段を有す。壁面の下部は礫層に達し，細礫を発見する。

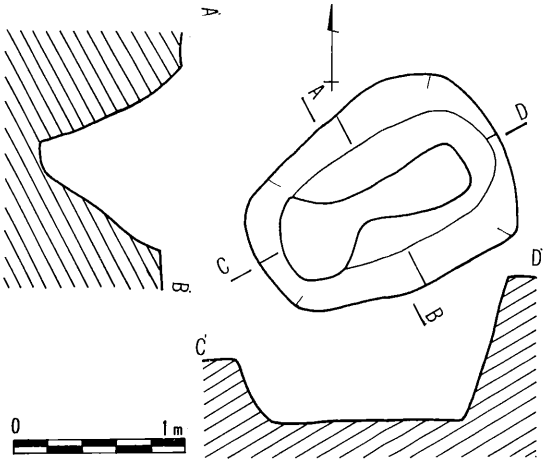
床面は軟弱で，中央部が若干低くなり，凹凸が著しい。

遺物は，全く出土しなかった。

**堀址第2号ピット**　（第23図，図版11）

本ピットは堀の肩よりやや東寄りに，また南側で第5号ピットと接して発見された。表土面より60cm位下ったローム層面を掘り込んである。平面プランは円形を呈す。規模は南北87cm，東西1mを測る。壁面は軟弱で，内弯気味を成す。床面は軟弱で中央部がやや凹む。

遺物は，全く出土しなかった。




**第22図　堀址第1号ピット実測図**

**堀址第3号ピット**　（第24図）

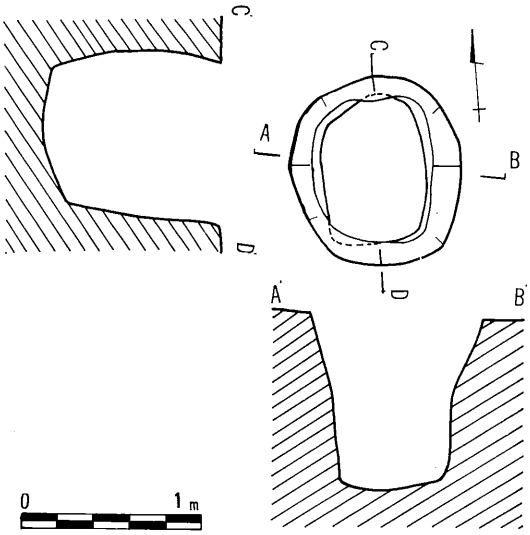
本ピットは堀の西側に肩部よりやや西によった位置に発見された。ローム層を掘り込んでつくられ，平面プランは上面は円形，下部は壁面を面取りして長方形にしてあった。壁面は軟弱で，下部は礫層に達する。東壁と西壁は壁面上部は外傾，下部は垂直状，南壁は垂直状，北壁は断面袋状を呈す。

床面は礫層でかたくたたいてあり，中央部が若干凹み，断面でみるとわん曲状になっている。

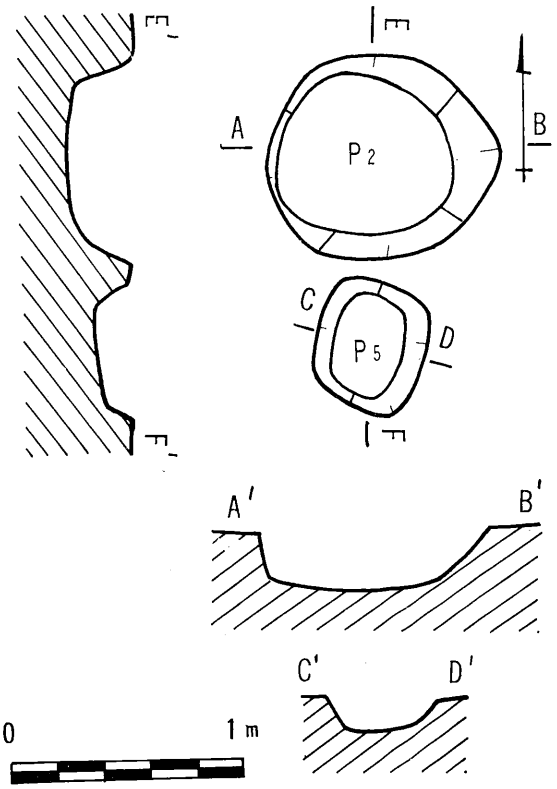
遺物は，全く出土しなかった。

**堀址第4号ピット**　（第25図，図版11）

本ピットは発見されたピットのなかでは最南部に位置し，さらに堀より西側にローム層を掘り込んであった。平面プランは上面は長円形状，下部は壁面を面取りにして長方形にしてあった。壁面は軟弱で，南壁と北壁は中央部まで外傾気味，下部は垂直状，西壁と東壁は内弯気味であった。床面は大般水平で，礫層ではあるが，かたいタタキになっていた。　遺物の出土はなかった。




第24図　堀址第３号ピット実測図




第23図　堀址第２・５号ピット実測図

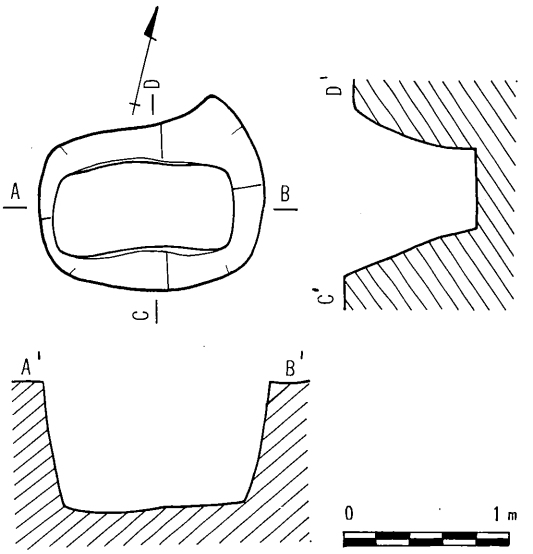
**堀址第５号ピット**　（第23図，図版11）

本ピットは第２号ピットの南側の位置にローム層を掘り込んであり，平面円形プランを呈している。規模は南北55cm，東西50cm位である。壁面は軟弱気味で，内弯状を呈している。床面は軟弱で中央部がわずかに低くなっている。

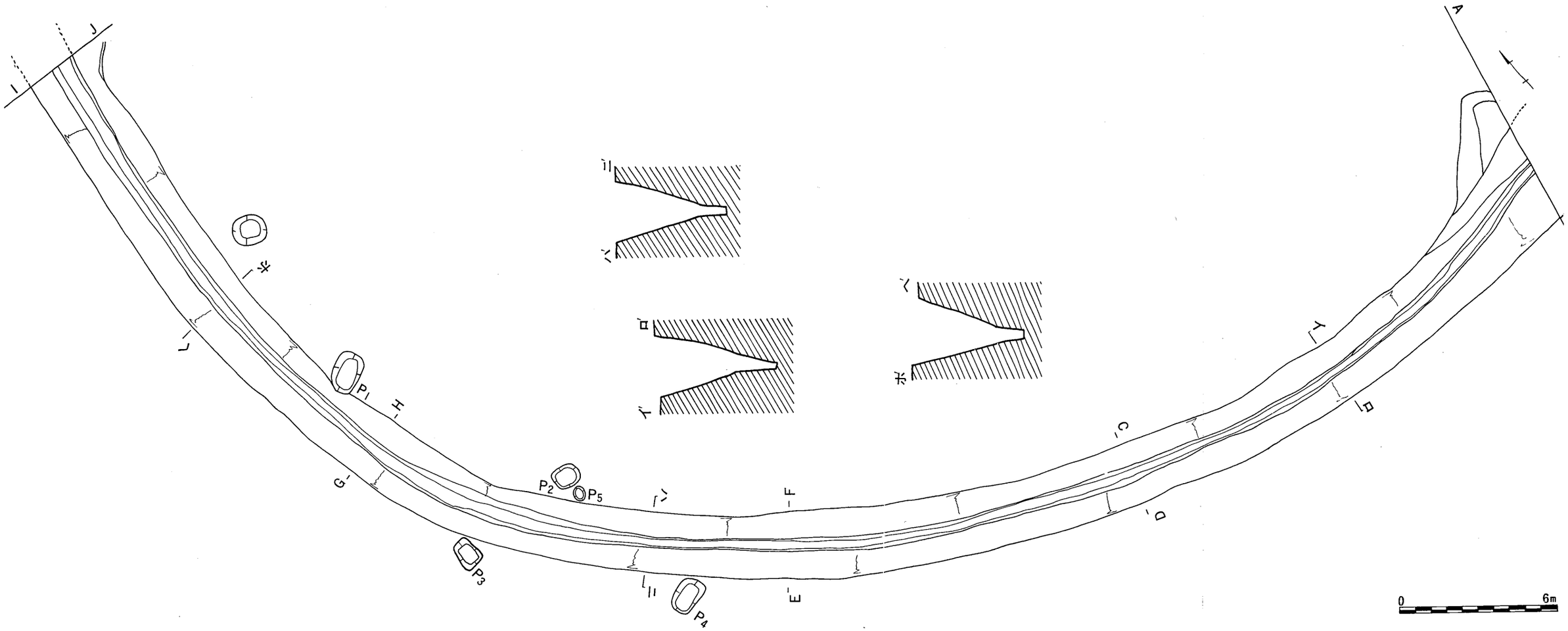
遺物は，全く出土しなかった。

## 第５節　堀　　址（第26～27図，図版７～10）

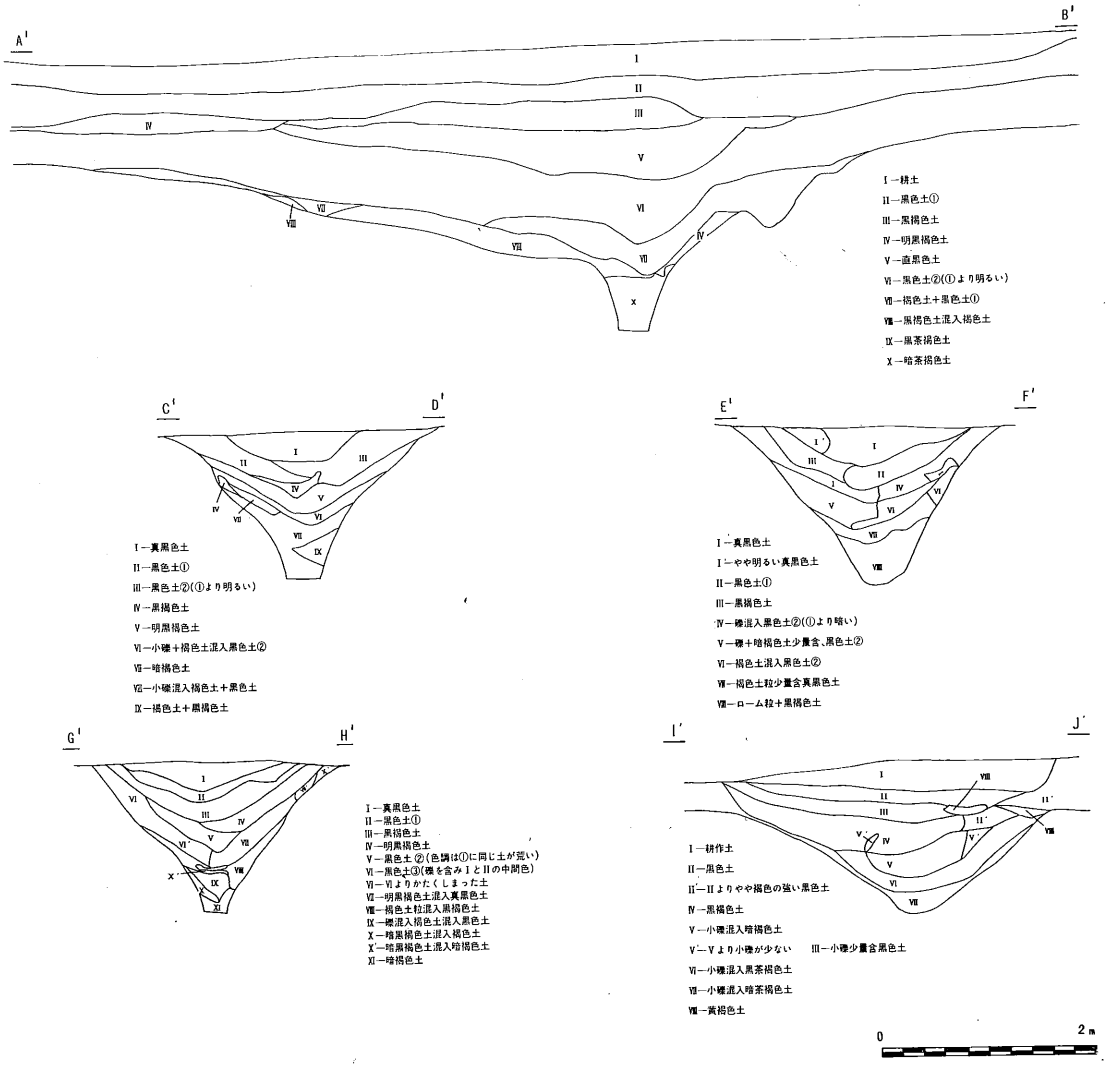
本堀址は城郭遺構の内部を区画するようなかっこうで発見された。規模等については第26図，27図を参照して下さい。堀の走りは若干円周状の形を成し，壁面は矢研堀りの発達が見事である。堀り込みの面の上部は外傾状に，下部は垂直状になっている。壁面のローム層は掘り込んだあとで，きれいに面をそろえるために整形をしてある。底面は大般水平を保つ，下の方50cm位は礫層にくいこんでつくられていた。　（飯塚　政美）




第25図　堀址第４号ピット実測図




第26図　堀址実測図




第27図　堀址土層断面図（第26図と照合すること）

# 第Ⅳ章　遺　　物

## 第1節　土　　器

土器の説明はスペースの関係上表を作製して，一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容説明を附記しておくことにする。その項目は図版，番号，胎土，保存状態，色調，文様の特徴，備考等である。

胎土，保存状態，色調についての記述は，明らかなる基準によったものではなく，筆者の主観によるものである。

（飯塚　政美）

| 図版 | 番号 | 胎　土 | 保存状態 | 色　調 | 厚さ(mm) | 文様の特徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 14 | 1 | 少量の長石 | 良　好 | 明黄褐色 | 6 | 櫛目文　波状文 | 第1号住居址 |
| 〃 | 2 | 多量の雲母 | 〃 | 〃 | 7 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 3 | 〃 | 〃 | 黒褐色 | 6 | 波状文 | 〃 |
| 〃 | 4 | 〃 | 〃 | 赤褐色 | 5 | 〃 | 第2号住居址 |
| 〃 | 5 | 〃 | 〃 | 茶褐色 | 6 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 6 | 少量の雲母 | 不　良 | 明黄褐色 | 7 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 7 | 〃 | 普　通 | 明薄色 | 6 | 櫛目文 | 〃 |
| 〃 | 8 | 多量の長石 | 〃 | 黒褐色 | 5 | 波状文 | 第1号住居址 |
| 〃 | 9 | 少量の雲母 | 良　好 | 〃 | 5 | 〃 | 第2号住居址 |
| 〃 | 10 | 〃 | 〃 | 明黄褐色 | 6 | 櫛目文　波状文 | 〃 |
| 〃 | 11 | 〃 | 〃 | 黒褐色 | 6 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 12 | 少量の長石 | 〃 | 〃 | 7 | 波状文 | 〃 |
| 〃 | 13 | 多量の雲母 | 〃 | 明茶褐色 | 6 | 〃 | 〃 |

**第2表　出土土器の形状一覧表（その1）**

| 図版 | 番号 | 胎　土 | 保存状態 | 色　調 | 厚さ(mm) | 文様の特徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 15 | 1 | 多量の雲母 | 不　良 | 黄褐色 | 8 | 波状文 | 第3号住居址 |
| 〃 | 2 | 多量の長石 | 〃 | 黒褐色 | 9 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 3 | 多量の雲母 | 普　通 | 〃 | 7 | 櫛目文 | 第4号住居址 |
| 〃 | 4 | 少量の雲母 | 〃 | 赤褐色 | 7 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 5 | 多量の雲母 | 〃 | 黒褐色 | 6 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 6 | 〃 | 良　好 | 〃 | 8 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 7 | 〃 | 〃 | 〃 | 6 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 8 | 〃 | 〃 | 明茶褐色 | 7 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 9 | 少量の雲母 | 不　良 | 黄褐色 | 5 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 10 | 多量の雲母 | 〃 | 黒褐色 | 6 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 11 | 〃 | 良　好 | 赤褐色 | 7 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 12 | 〃 | 〃 | 〃 | 7 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 13 | 〃 | 〃 | 茶褐色 | 6 | 〃 | 〃 |

**第3表　出土土器の形状一覧表（その2）**

| 図版 | 番号 | 胎　土 | 保存状態 | 色　調 | 厚さ(mm) | 文様の特徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 16 | 1 | 少量の雲母 | 普　通 | 黄褐色 | 3 | 波状文 | 第5号住居址 |
| 〃 | 2 | 〃 | 良　好 | 黒褐色 | 5 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 3 | 多量の雲母 | 〃 | 黄褐色 | 8 | 土師器 | 第6号住居址 |
| 〃 | 4 | 〃 | 普　通 | 〃 | 6 | 波状文 | 第7号住居址 |
| 〃 | 5 | 少量の長石 | 良　好 | 赤褐色 | 7 | 無　文 | 〃 |
| 〃 | 6 | 〃 | 〃 | 〃 | 7 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 7 | 〃 | 〃 | 〃 | 7 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 8 | 〃 | 〃 | 〃 | 7 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 9 | 少量の雲母 | 不　良 | 黒褐色 | 6 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 10 | 〃 | 〃 | 黄褐色 | 7 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 11 | 〃 | 〃 | 黒褐色 | 5 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 12 | 〃 | 〃 | 〃 | 6 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 13 | 〃 | 〃 | 〃 | 5 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 14 | 〃 | 〃 | 〃 | 7 | 波状文 | 〃 |
| 〃 | 15 | 〃 | 普　通 | 黄褐色 | 5 | 櫛目文 | 〃 |

**第4表　出土土器の形状一覧表（その3）**

| 図版 | 番号 | 胎　土 | 保存状態 | 色　調 | 厚さ(mm) | 文様の特徴 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 17 | 1 | 少量の雲母 | 普　通 | 黒褐色 | 6 | 沈線　粘土紐　刺突文 | 第8号住居址 |
| 〃 | 2 | 〃 | 良　好 | 〃 | 4 | 縄文　粘土紐 | 〃 |
| 〃 | 3 | 多量の雲母 | 普　通 | 茶褐色 | 8 | 隆線　刻目　縄文 | 〃 |
| 〃 | 4 | 〃 | 良　好 | 黒褐色 | 5 | 縄文　爪形文 | 〃 |
| 〃 | 5 | 少量の長石 | 〃 | 〃 | 5 | 縄文　粘土紐 | 〃 |
| 〃 | 6 | 多量の雲母 | 普　通 | 茶褐色 | 10 | 〃　〃 | 〃 |
| 〃 | 7 | 〃 | 不　良 | 黄褐色 | 7 | 縄文　刻目　粘土紐 | 〃 |
| 〃 | 8 | 〃 | 良　好 | 赤褐色 | 8 | 縄文 | 〃 |
| 〃 | 9 | 〃 | 普　通 | 黒褐色 | 9 | 沈線　刻目 | 〃 |
| 〃 | 10 | 多量の長石 | 不　良 | 茶褐色 | 8 | 沈線　縄文 | 〃 |
| 〃 | 11 | 〃 | 良　好 | 黒褐色 | 7 | 沈線 | 〃 |
| 〃 | 12 | 多量の雲母 | 不　良 | 黄褐色 | 9 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 13 | 〃 | 〃 | 黒褐色 | 8 | 〃 | 〃 |
| 〃 | 14 | 少量の長石 | 普　通 | 〃 | 5 | 隆線　沈線 | 〃 |
| 〃 | 15 | 〃 | 不　良 | 茶褐色 | 6 | 沈線　刻目 | 〃 |

**第5表　出土土器の形状一覧表（その4）**

## 第2節　石　　器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図版，番号，名称，器形・石質，備考である。

（飯塚　政美）

| 図版 | 番号 | 名　称 | 器　形 | 石　質 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 18 | 1 | 凹　石 | 定角状 | 砂　岩 | 第4号住居址 |
| 〃 | 2 | タタキ石 | | 硬砂岩 | 〃 |
| 〃 | 3 | 磨製石斧 | | 蛇紋岩 | 〃 |
| 〃 | 4 | タタキ石 | | 緑泥岩 | 第3号住居址 |
| 〃 | 5 | 磨　石 | | 硬砂岩 | 第2号住居址 |
| 〃 | 6 | タタキ石 | | 〃 | 〃 |

**第6表　出土石器の形状一覧表（その1）**

| 図版 | 番号 | 名　称 | 器　形 | 石　質 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 19 | 1 | 磨　石 | 乳棒状 | 硬砂岩 | 第5号住居址 |
| 〃 | 2 | 磨製石斧 | | 緑泥岩 | 〃 |
| 〃 | 3 | 〃 | | 〃 | 第6号住居址 |
| 〃 | 4 | 磨　石 | | 砂　岩 | 第7号住居址 |
| 〃 | 5 | 〃 | | 〃 | 第8号住居址 |
| 〃 | 6 | 〃 | | 硬砂岩 | 〃 |
| 〃 | 7 | 〃 | | 〃 | 第7号住居址 |

**第7表　出土石器の形状一覧表（その2）**

# 第V章　ま　と　め

西春近は伊那市の南部、また竜西地区（天竜川の西側をさす）に位置し、地形的にみれば数多くの小河川が入り込み、解析地形を成している。したがって、遺跡数は市内では最も多く、現在確認されているだけで78個所に及んでいる。

今回、ここに報告する中村遺跡もこのうちの１つに数えられている。同遺跡からは、縄文前期終末期住居址、弥生後期住居址、奈良時代住居址、中世の堀址等時期を異にする遺構の検出があった。

縄文前期の住居址は西側は堀によって破壊はされていたが、伊那市に於ては数少ない住居址であった。炉は埋甕炉であって、正位に埋められていた。この土器は信州でいう、晴ヶ峰や踊場式に類似していた。本址より出土した土器のなかにミミズばれ状の粘土紐の発達が見事、また極めて薄手の関西系の土器が相当量みられた。いわゆる大歳山式土器の一群かと思われる。

弥生後期の住居址が数多く発見された遺跡としては郡下では、駒ヶ根の狐久保、宮田の姫宮、伊那の和手、箕輪の北城、辰野の樋口五反田等の遺跡があげられる。

プランは一般的にみられる隅丸方形であり大きさ等については特異なものはなかった。
埋甕炉は全て土器が正位の状態で出土し、大般は甕は１個であったが、第３号住居址のように３個発見されたのも存在した。第５号住居址のように枕石を並べてあった。

炉の位置はいろいろあり、その特徴を説明するとともに、それに該当する住居址を述べてみると、次のようになる。

住居址の北側の位置で、２柱穴を結ぶ線より北側に位置しているのは第１号住居址

住居址の北側の位置で２柱穴を結ぶ線より南側に位置しているのは第２号住居址、第４号住居址

住居址の西側の位置で２柱穴を結ぶ線の中心点に位置しているのは第３号住居址

住居址の東側の位置で２柱穴を結ぶ線より東側に位置しているのは第５号住居址

住居址の西側の位置で２柱穴を結ぶ線の中心点に位置しているのは第７号住居址、これらのことは家の主軸方向の時期によって変化したことがうかがわれる。

奈良時代の住居址は大部分が第７号土壙、第８号土壙によって切られてしまっているために、その確実なる実態はつかめなかった。

堀は中世城郭を代表する遺構であることは何人も疑がわない事実である。前述したような地形の為に当西春近地区には数多くの城郭が存在し、その主たるものは小出城、あら城、内城、丸山、物見ヤ城、表木城、安岡城等である。今回発掘した堀址附近の状態を考えてみると、北側の戸沢川をはさんであら城、南側の小戸沢川をはさんで内城、その南側の沢をはさんで丸山の城郭が取り囲み、東側は天竜川や三峰川によって形成された高い河岸段丘となっている。このような為に後背の城の前戦防衛の場所のようなところであろう。前書はこのくらいにして、堀のことについて述べてみようと思う。堀は東側と北側に大きな段丘を持っており、段丘崖に掘り凹めた痕跡が認められ、東側から西側を経へ、北側の段丘崖へと連ながっている。その軌跡は若干弧状を描き、壁面は矢研堀り状態が見事であった。

土壙は10ヵ所発見されたが、遺物が出土しないので第３号土壙を抜いて時期は不詳である。

（飯塚　政美）

参　考　文　献

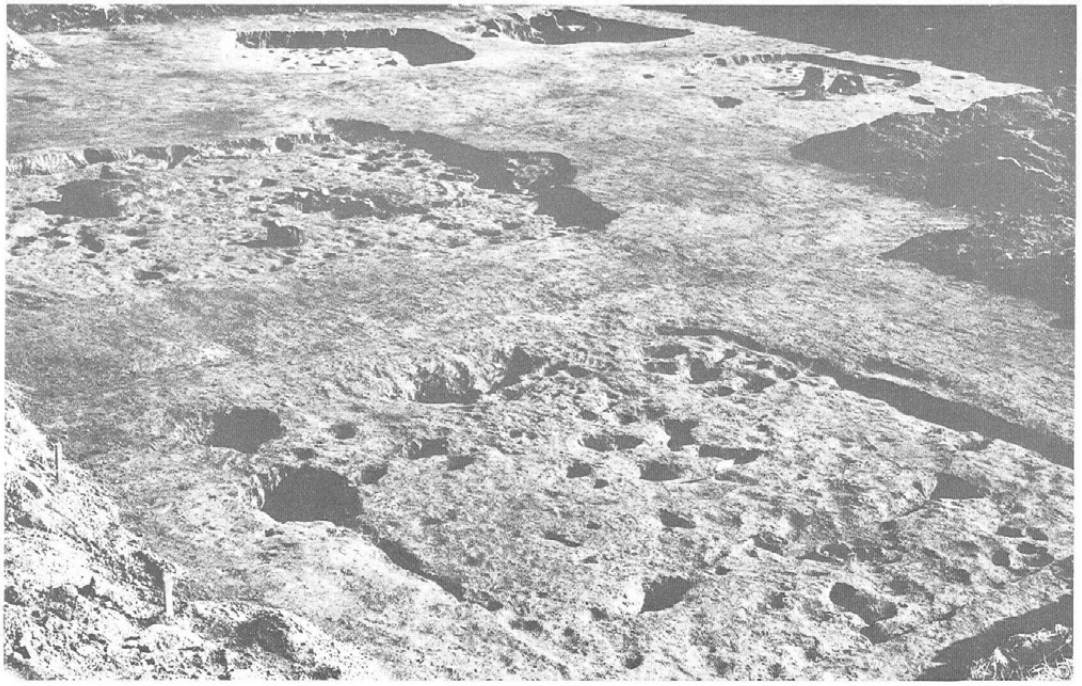
○上伊那郡誌　歴史編
○伊那の古城　篠田　徳登著

# 図　　版

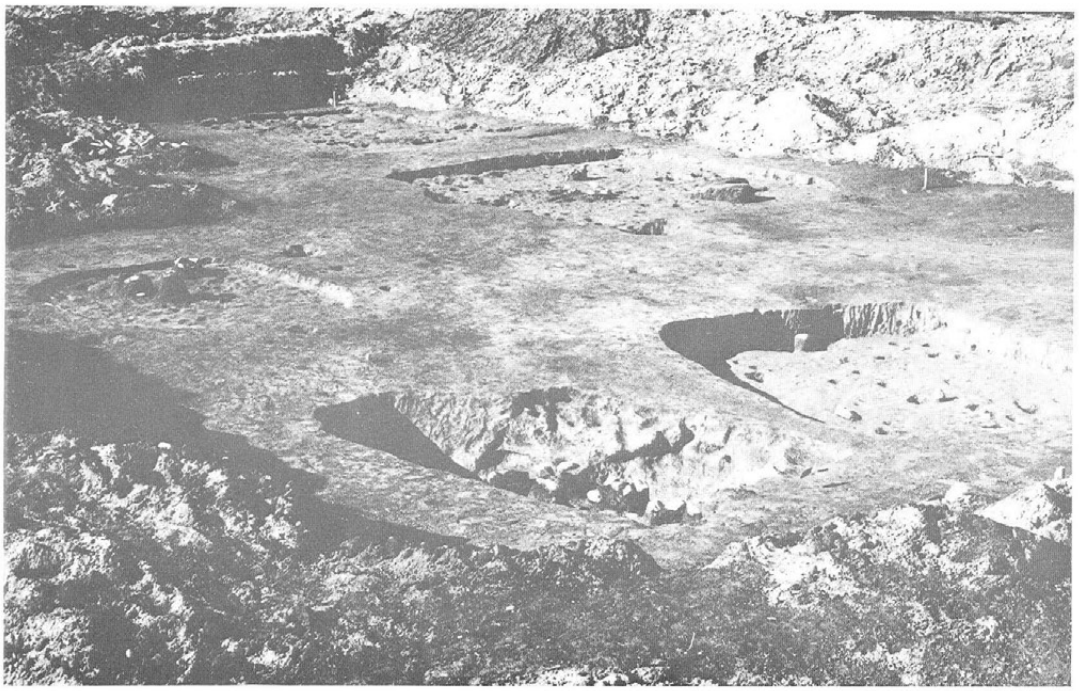
遺跡地を東側より眺む

遺跡地を南東より眺む

図版1　遺 跡 全 景

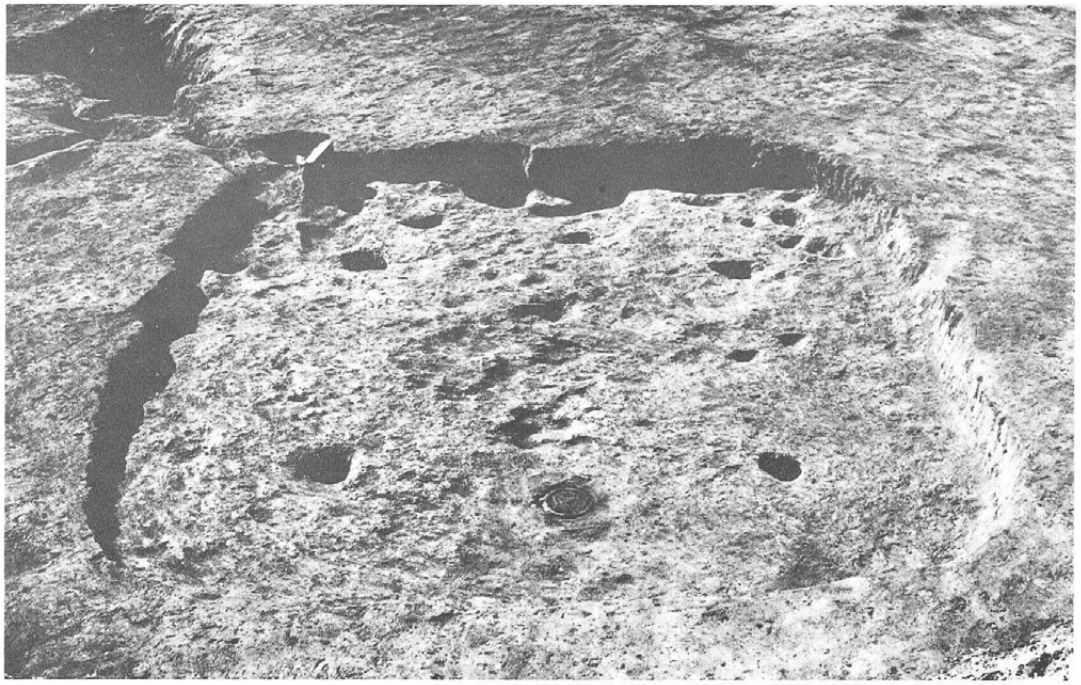


遺構配置（東側から）

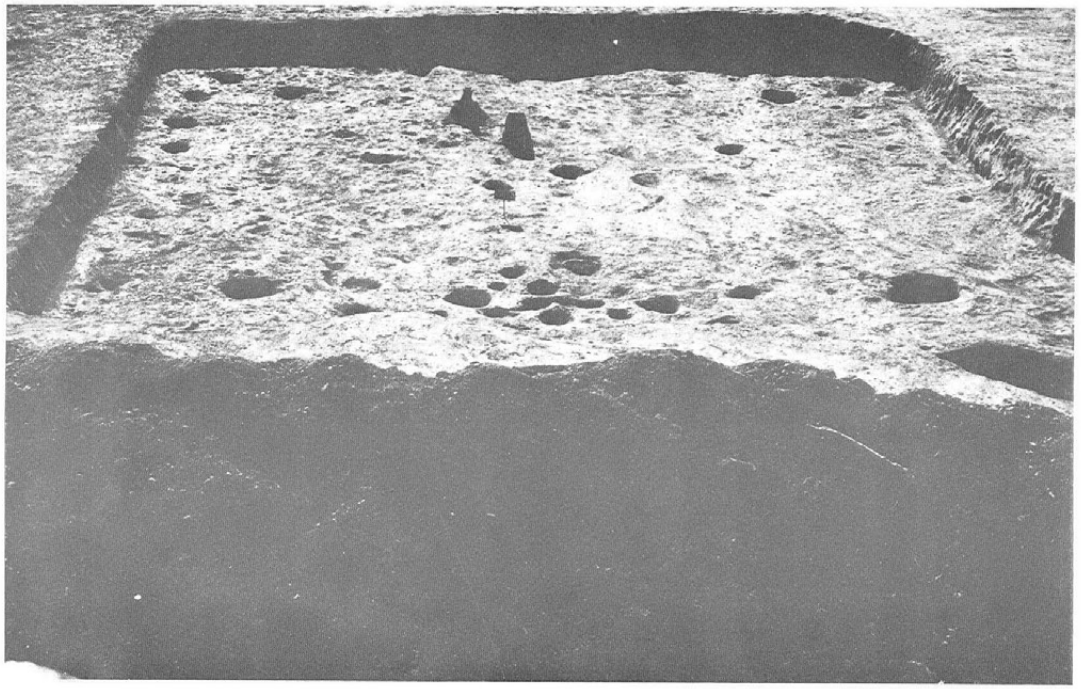


遺構配置（西側から）

図版２　遺　　構

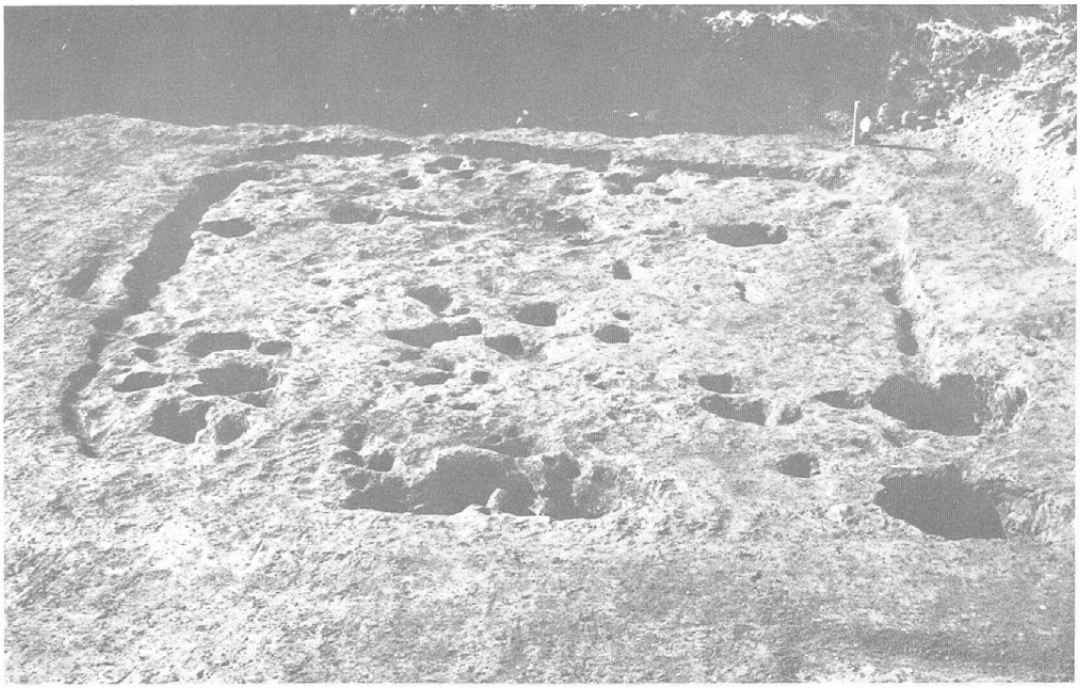


第１号住居址

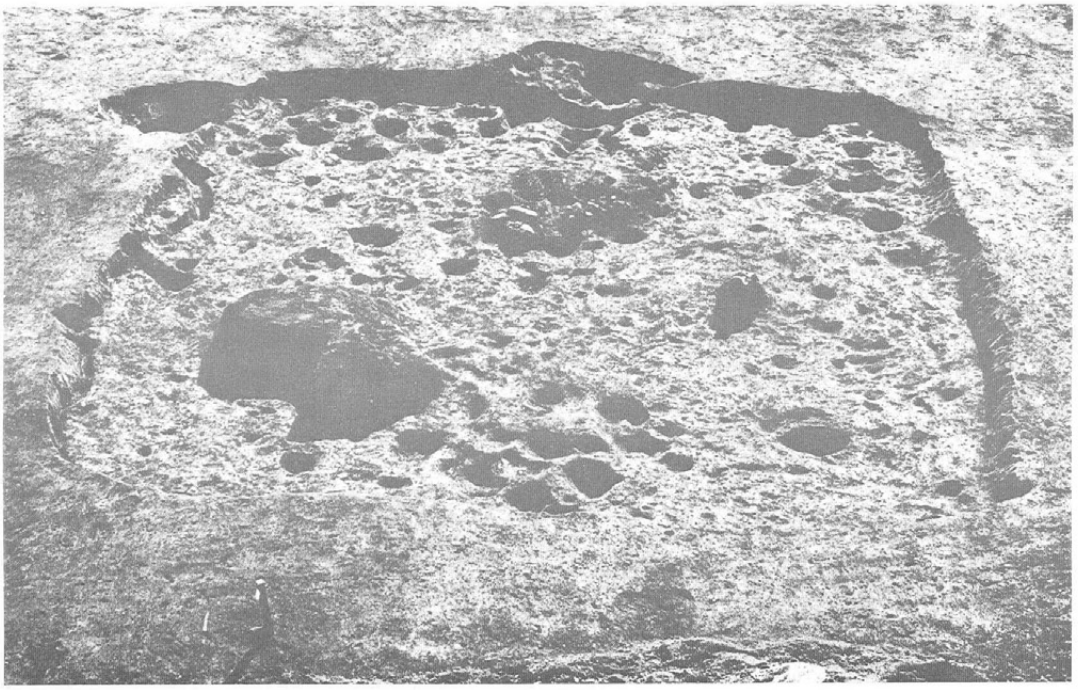


第２号住居址

図版３　遺　　構



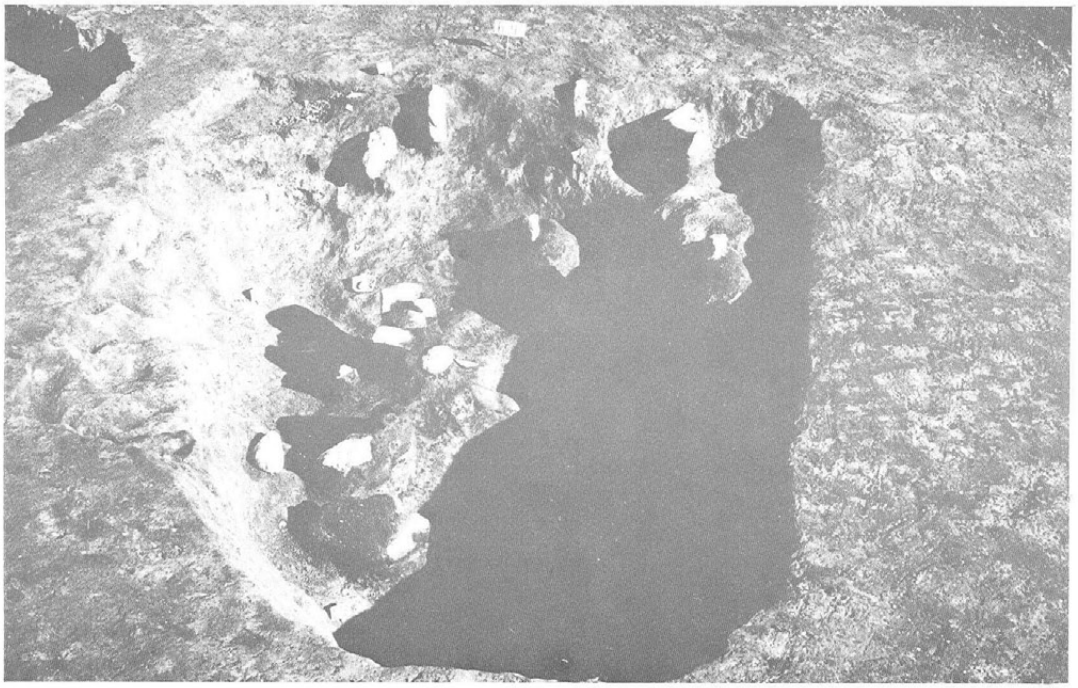
第 3 号住居址



第 4 号住居址

図版 4　遺　　構

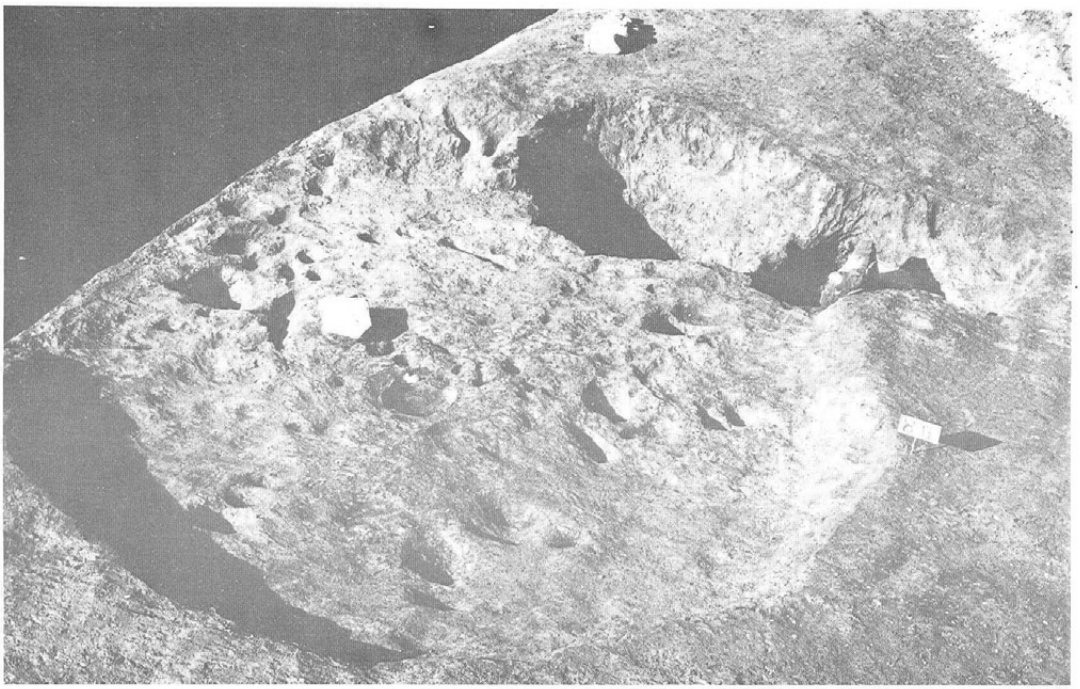
第5号住居址



第6号住居址，第7・8号土壙

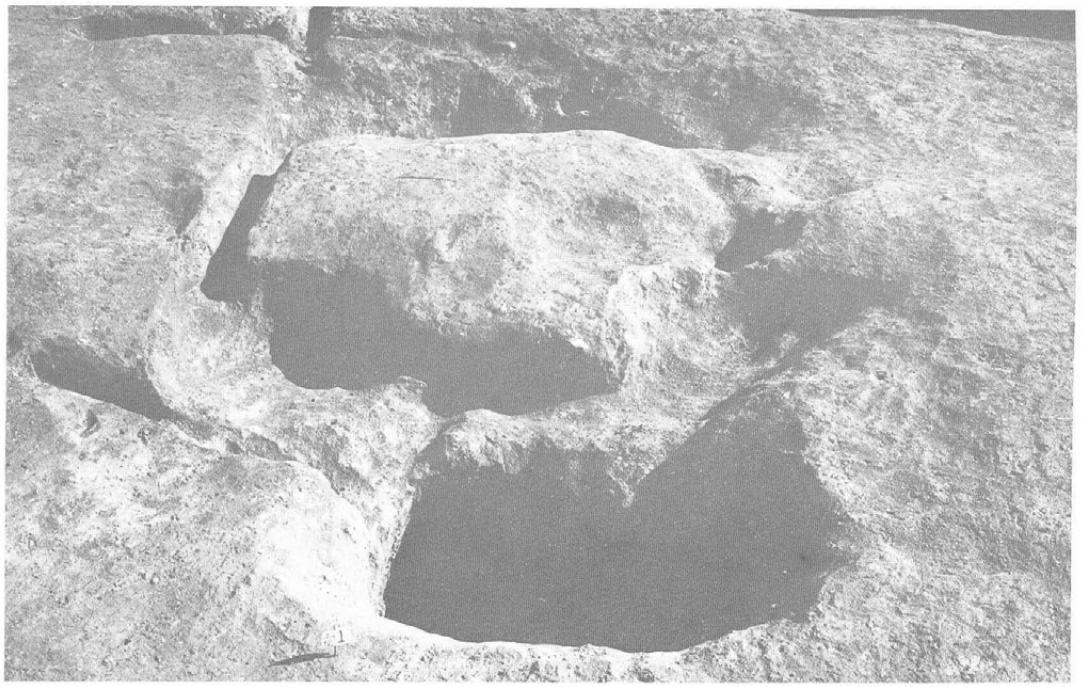
図版5　遺　　構

第７号住居址



第８号住居址

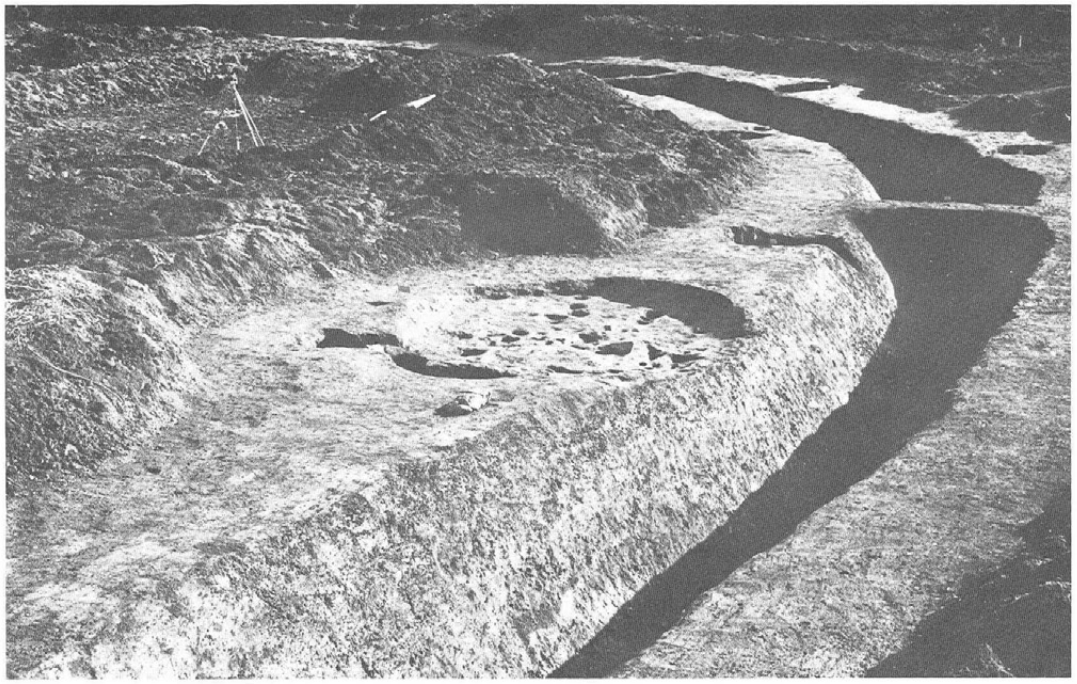
図版６　遺　　構



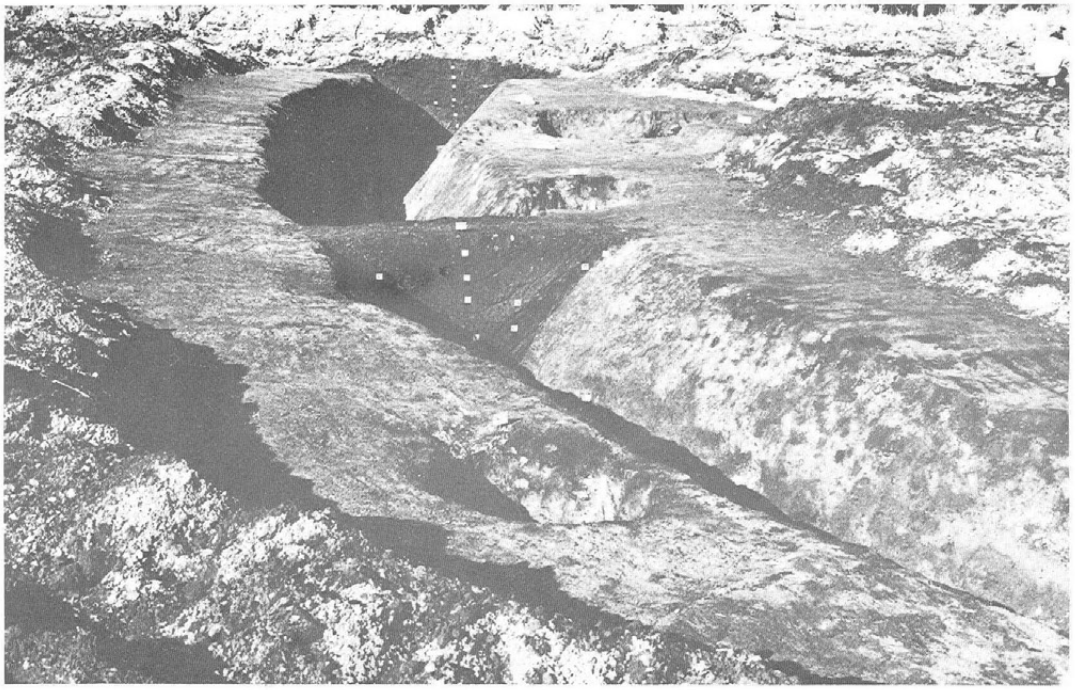
第１号ロームマウンド・第１号土壙

堀　　址

図版７　遺　　構

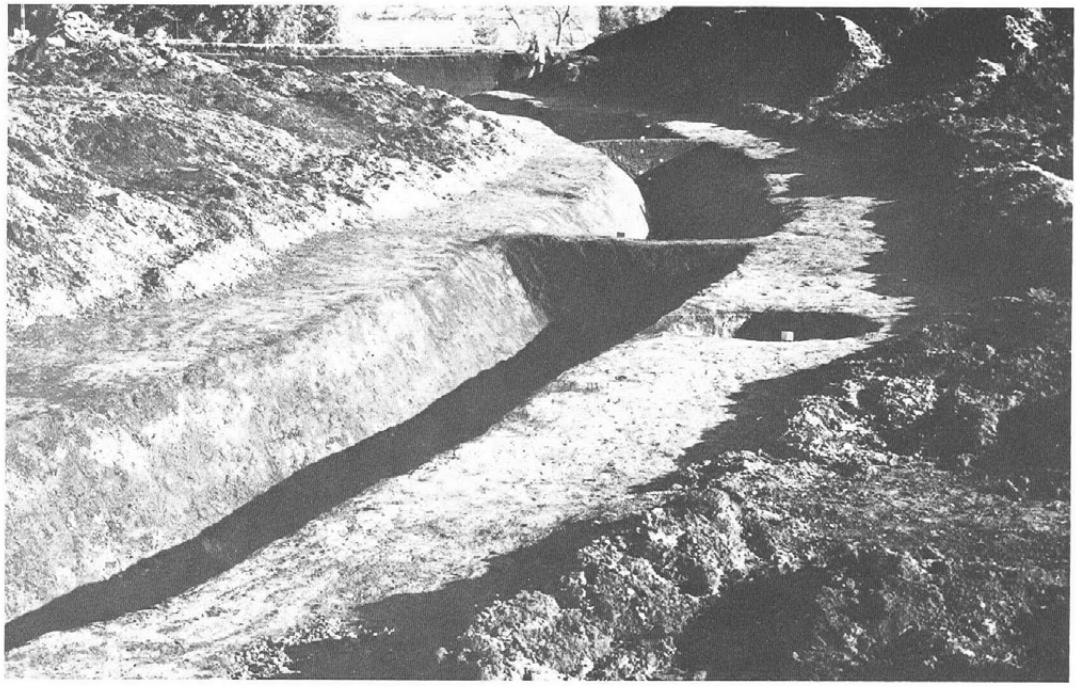


堀　　址

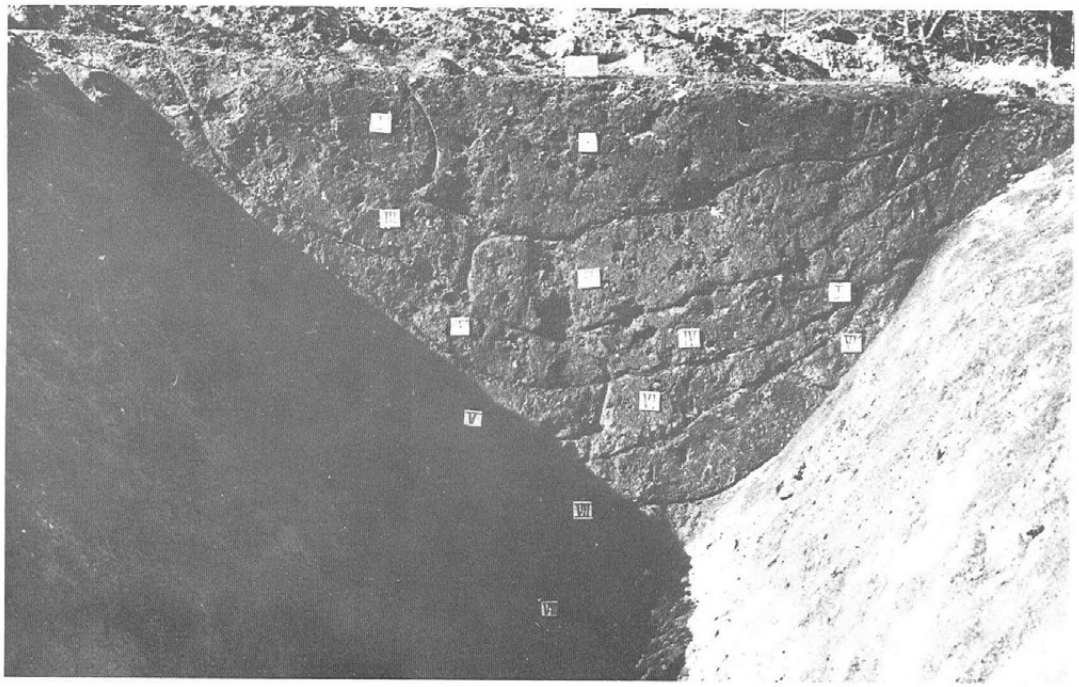


堀　　址

図版 8　遺　　構

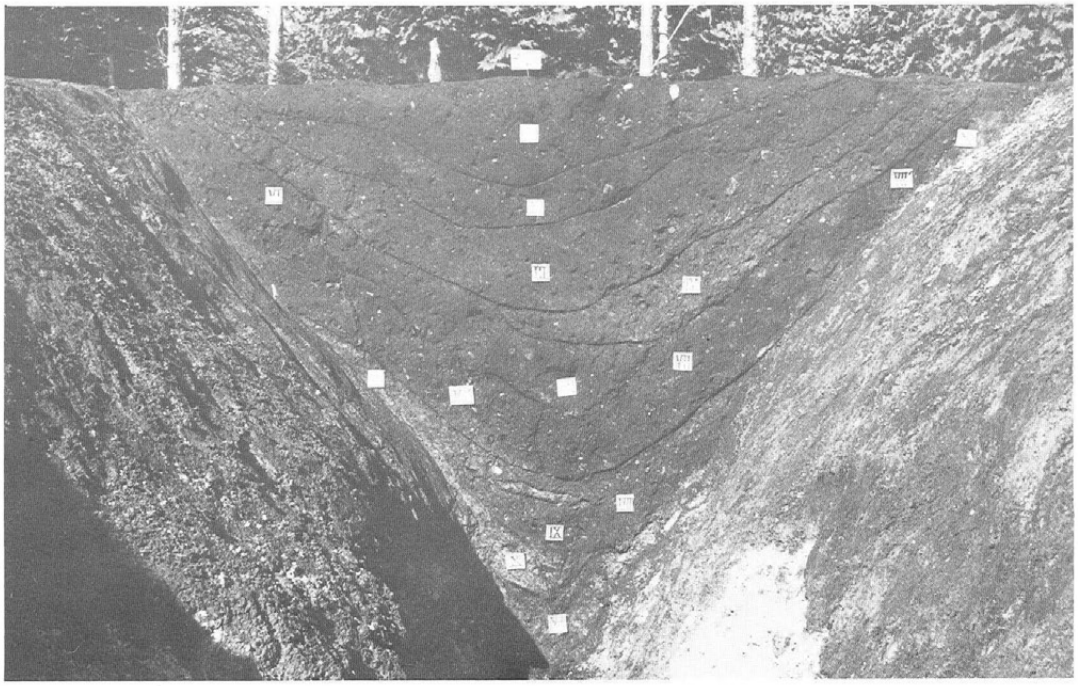


堀　　址

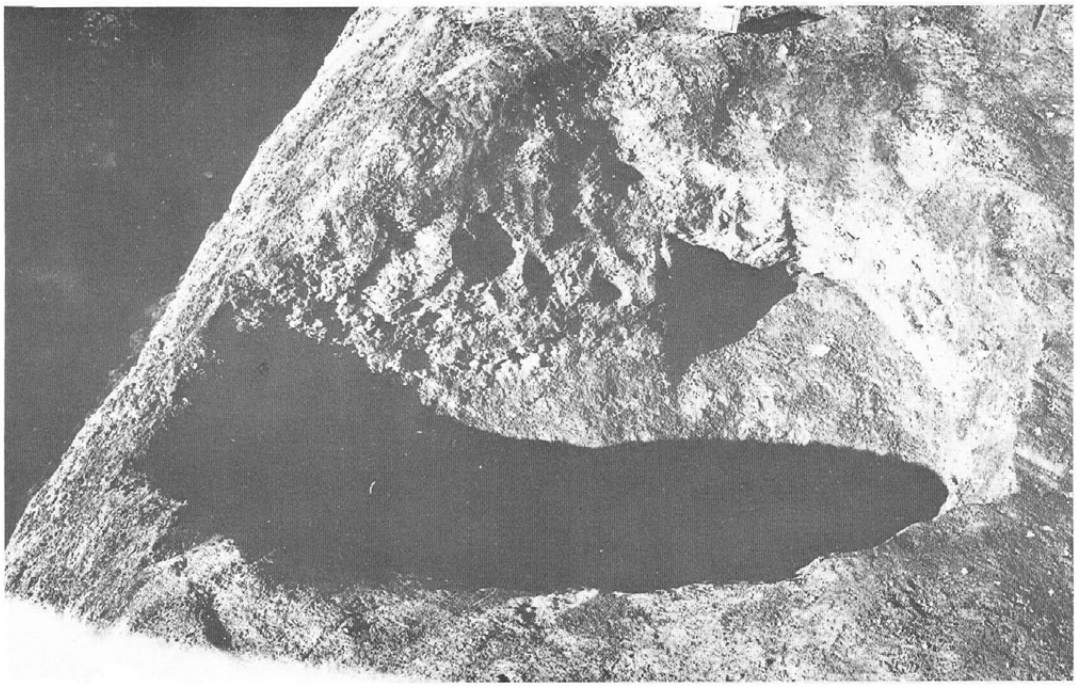


堀址断面

図版 9　遺　　構

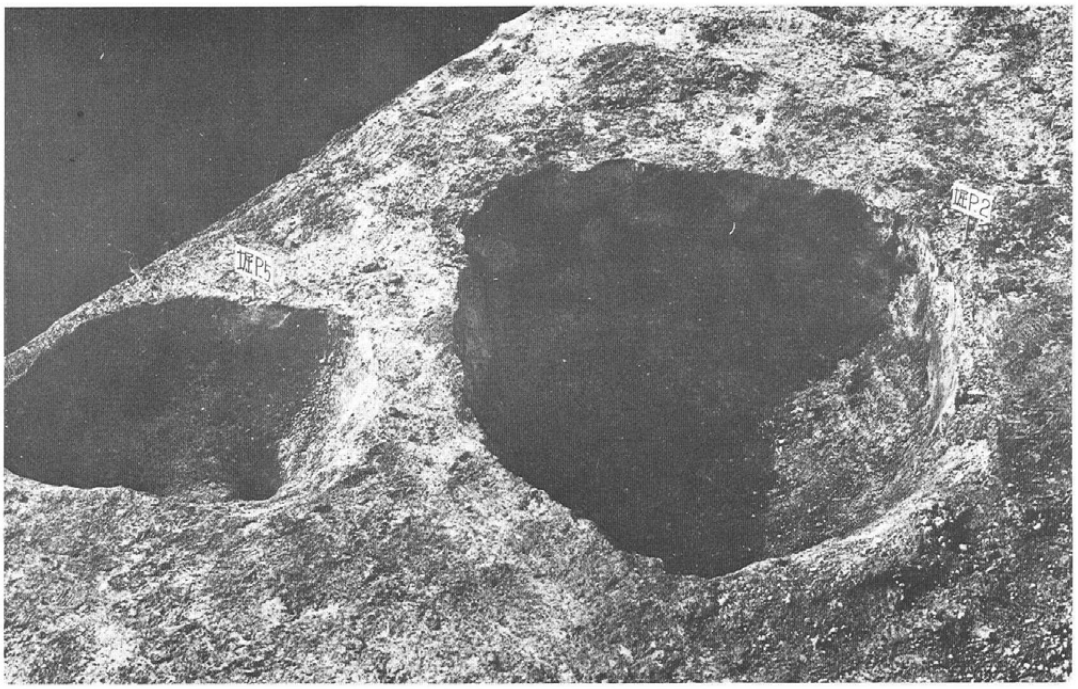


堀址断面

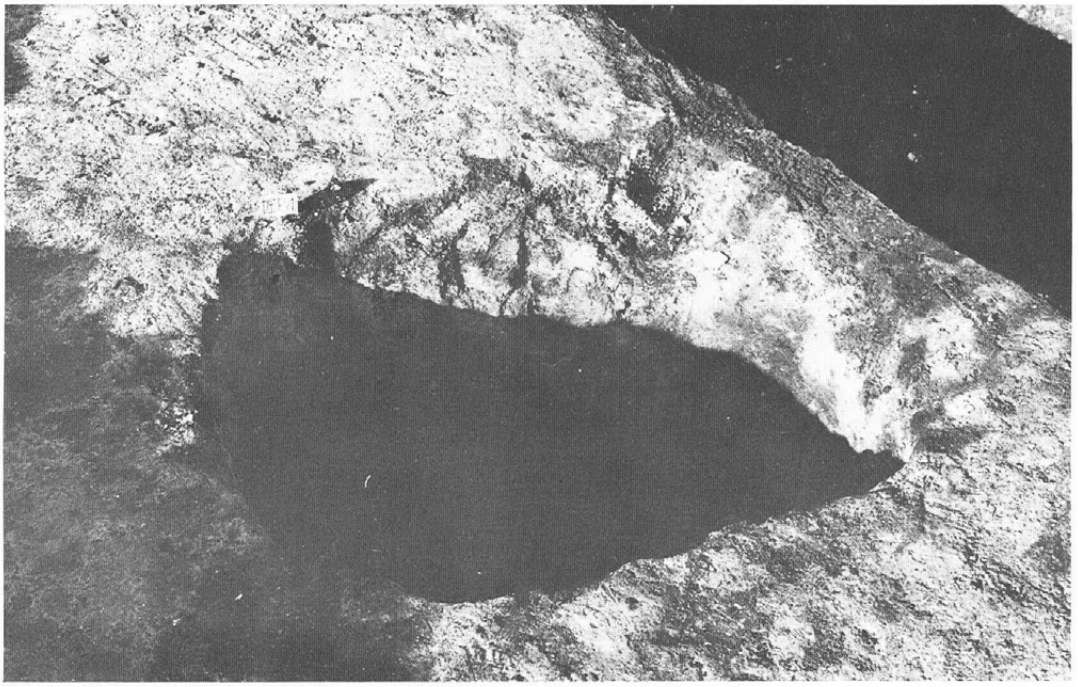


堀址第１号ピット

図版10　遺　　構




堀址第２・５号ピット

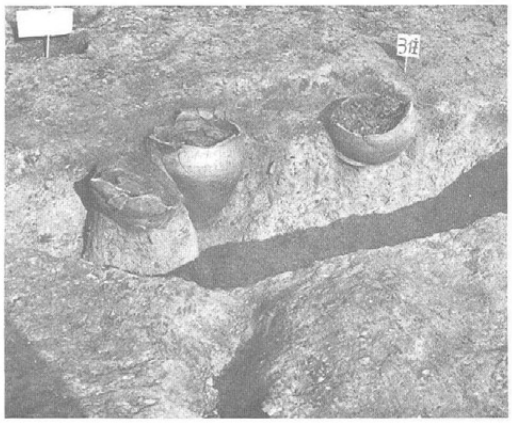


堀址第４ピット

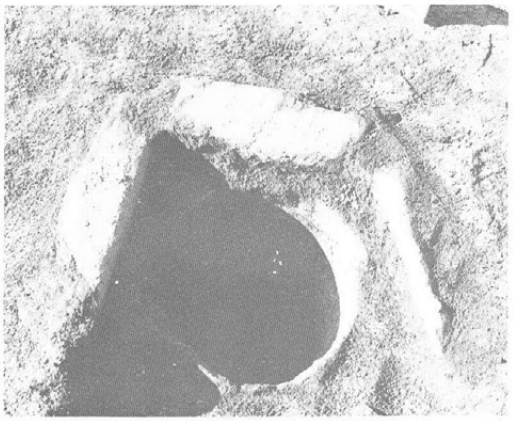
図版11　遺　　構

第１号住居址埋甕炉断面

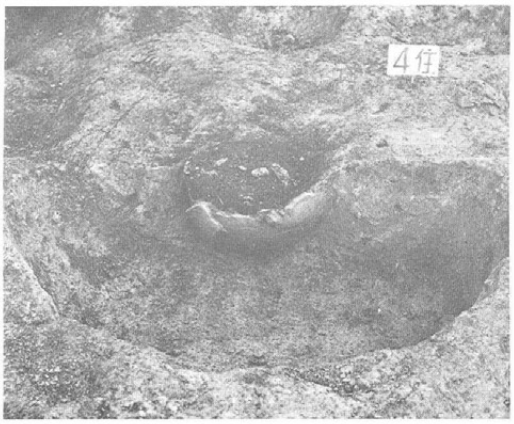
第２号住居址埋甕炉断面



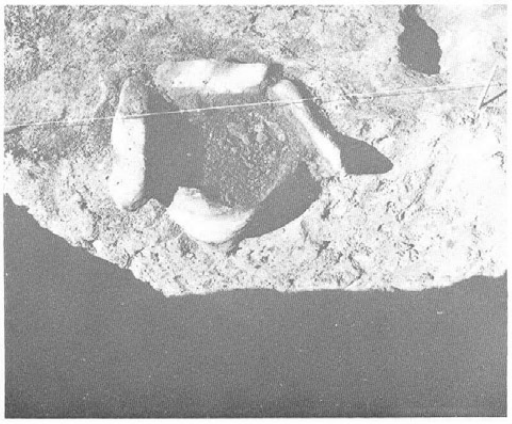

第３号住居址埋甕炉断面



第５号住居址埋甕炉上部



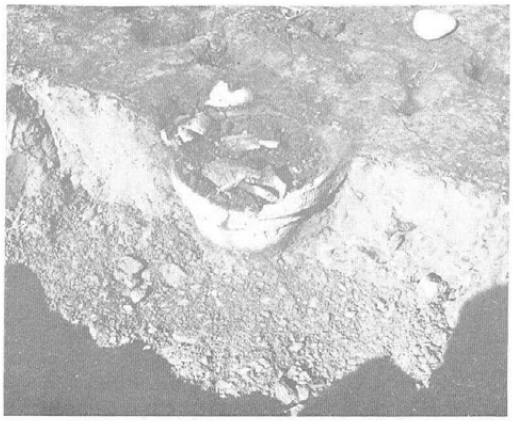

第４号住居址埋甕炉断面



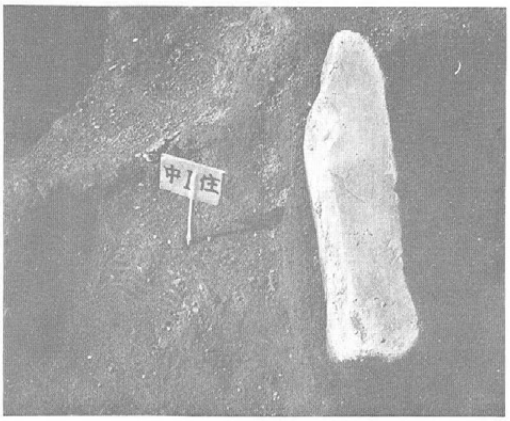
第５号住居址埋甕炉断面

図版12　遺　　構

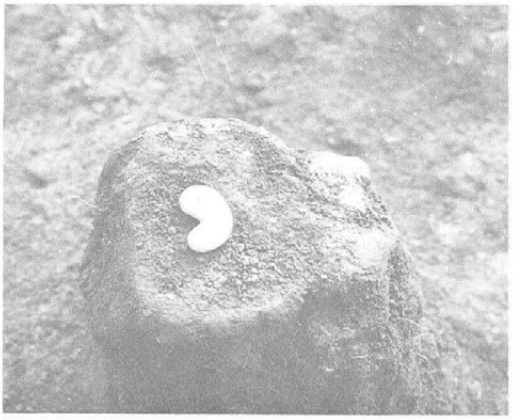
第７号住居址埋甕炉断面



第８号住居址埋甕炉断面

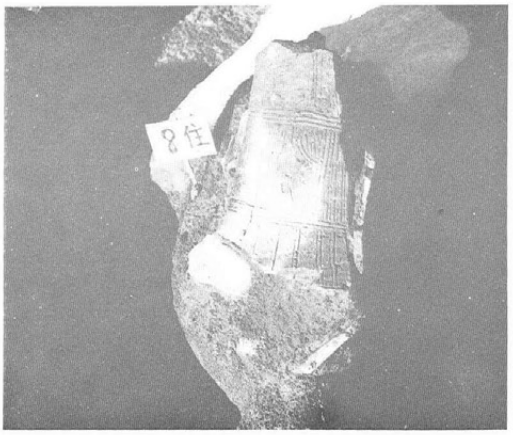



砥石出土状況（第１号住居址）



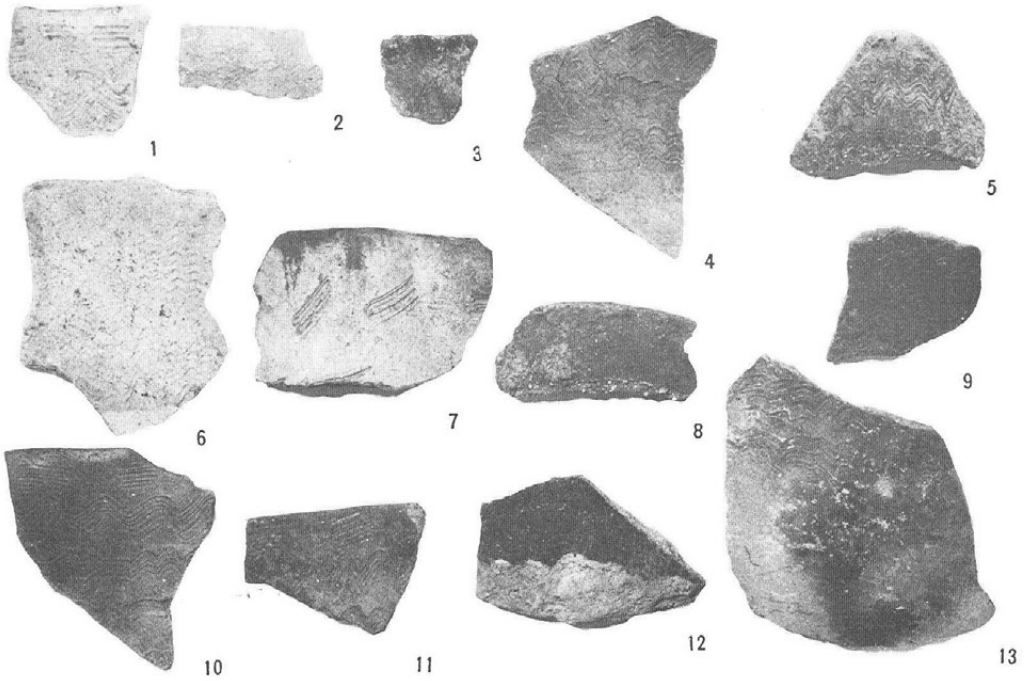
勾玉出土状況（第２号住居址）

土器出土状況（第４号住居址）

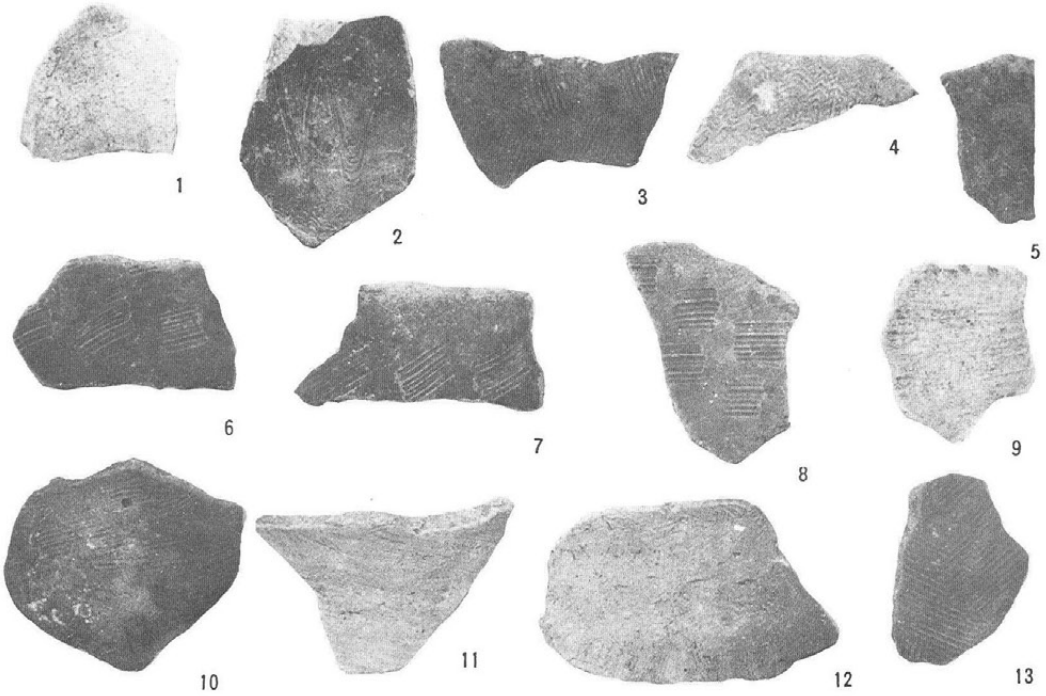



土器出土状況（第８号住居址）

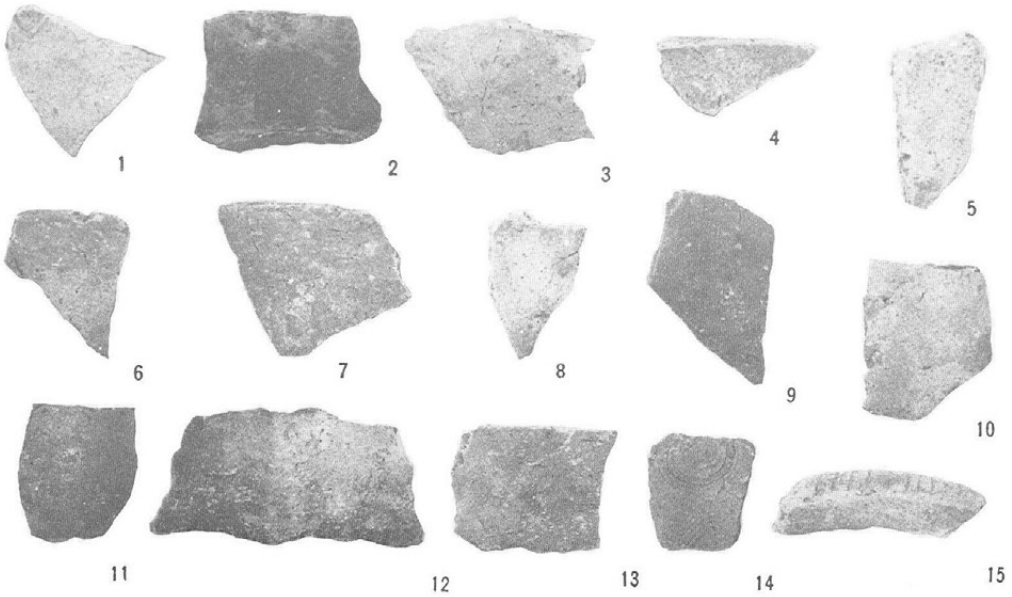
図版13　遺構及び遺物出土状況



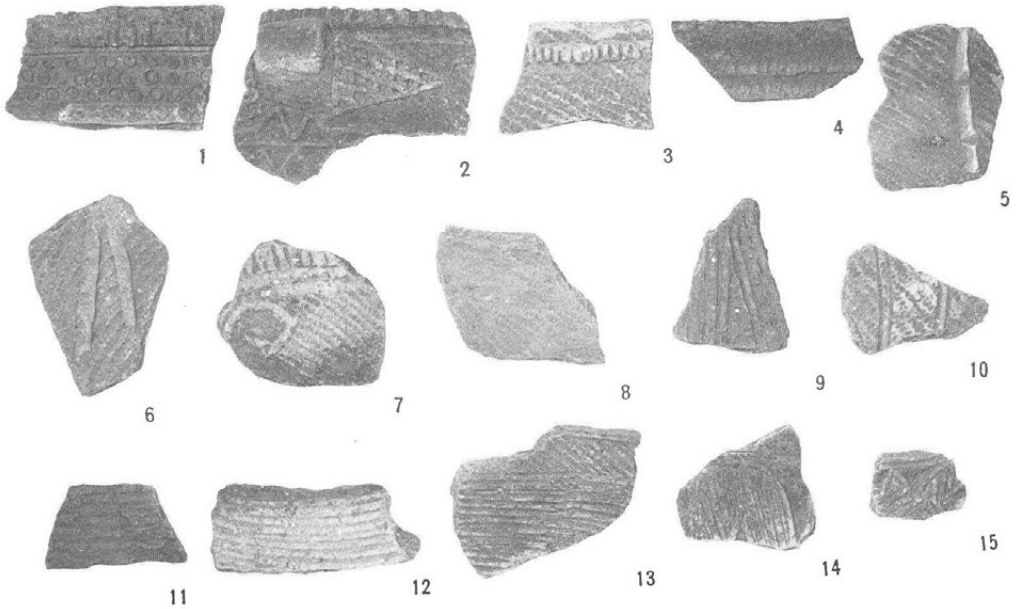

図版14　出 土 土 器



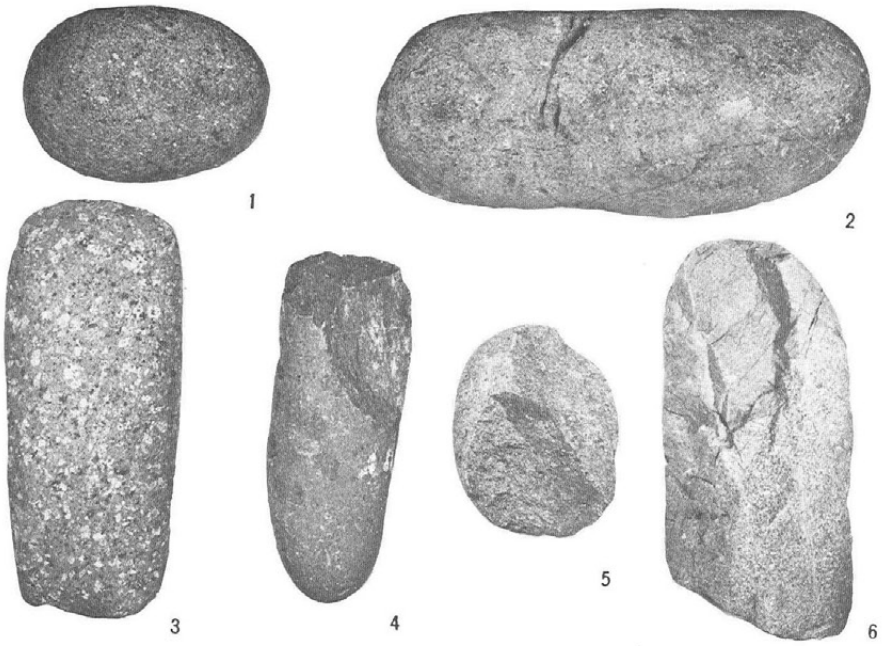

図版15　出 土 土 器



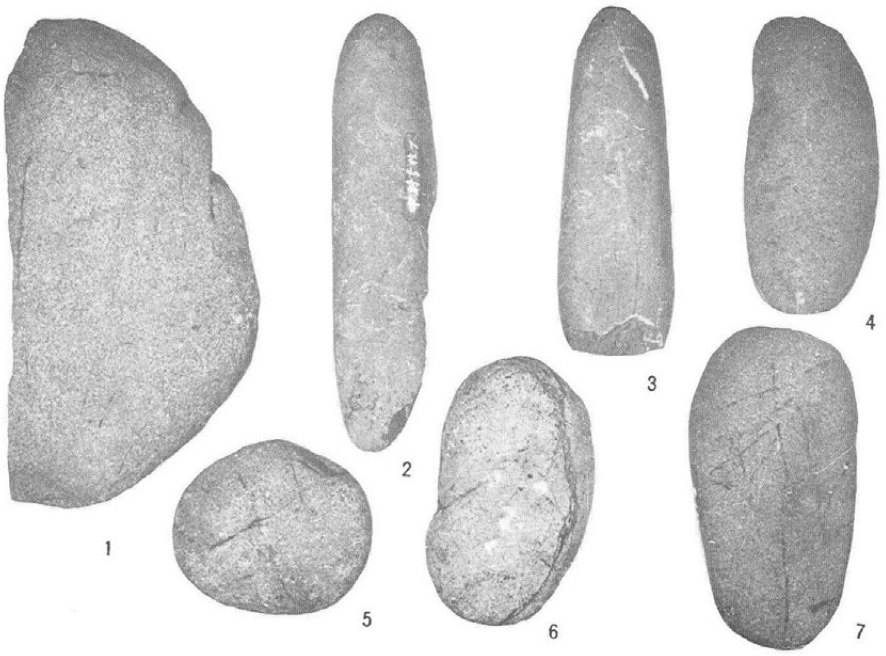

図版16　出 土 土 器




図版17　出 土 土 器




図版18　出 土 石 器




図版19　出 土 石 器

**中　村　遺　跡**

緊急発掘調査報告

昭和53年3月15日　印刷

昭和53年3月20日　発行

発行所　長野県伊那市教育委員会

印刷所　長野県諏訪郡下諏訪町広瀬町

㈱　オ　ノ　ウ　エ　印　刷